明治三十年十月二十一日發行

女鑑

第百四拾三號

東京國光社

女鑑第百四拾三號

目録

圓珠尼



人の二面

人の二面あるばかり、醜く、につくき、不具なるものはあらじ。人の二面とは、その心に、その言葉に、その行に、表裏あるをいふ。即、その心の中の、言葉の表と異り、或は、その行ふ狀の、詞の上と異り、或は、その心のかをり、表は、いかにも、めでたかりげに見えて、裏は、極めて、いやしきなどより、或は、その言葉の色の、よそにては、殊更に、柔和しく、美しく、つくり飾りて、うちにては、荒々しく、汚く、或は、その行狀の、よそにありては、いとも、柔和しく、正しく、取りつくろひて、うちにありては、荒々しく、みだりがはしきなど、すべて、一人の心裡、言行にて、相表裏する所あるは、即、人の二面にして、人として、實に、醜く、につくき、不具者といふべきなり。

心裡と言行と合はず、或は、いふ言葉と行ふ狀と相反し、或は、心のうはべ美しくして、裏の汚きなどは、人の二面の中の、最、醜き不具者にて、かゝる者のにくむべきことは、古よりも、常に世に戒め來れることにて、此處に、新しう言立てすべき要もあらず。されど、その言葉に、行狀に、内外の表裏あることは、いかなればにかあらむ、世の心ある人も、さばかり醜きことにもおぼえざるにや、殊に、今の世には、うちまかせて、戒むる人も無きが如くなれど、これも、また、醜く、にくからずやは。しかも、いつしか、增長せば、彼の心裡と言行と相合はず、言ふ所と行ふ狀と相異れる如き大醜をも作るものなれば、つとめて、戒めも、正しもせざるべからず。

當世の女子を見るに、これを外にてあへば、そのいふ所は、めでたく、美はしく、其の聲音は、やさしく、すゞしく、さながら、天女の天降りしも、かくやとおぼゆるばかりの言の葉もありながら、これを内にてきけば、其のいふ所は、あさましく、汚く、その聲音は、荒々しく、騒がしく、宛も、狂者の如く、痴者の如く、甚

しきは、悪鬼とも、夜叉ともおぼゆるばかりなるあり。また、外にてあへは、戸障子の開閉より、起居、應對の擧動など、すべて、しとやかに、正しく、やさしく、美はしう、誠に優雅慍厚の美風ありながら、その人を、うちにて見れば、戸障子の開閉に、庭の小鳥を驚かし、起居の袖に、坐敷の塵を動かし、ねころびたるまゝにて、父母、長者に接するなどはいはずもあれ、甚しきは、泣き狂ひて、長者と爭ひにくみ、坐右の物を放げちらして、召仕の者を罵りちらすさへあり、おなじ人にして、內と外とによりて、かゝる、言語、擧動の異るは、いかなる故ぞや。

或は、斯く、外にて、殊更に、やさしく、しとやかに、めでたく、美はしく、言ひもし行ひもするを以て、女子のたしなみなりと思ふ人もあらめど、たしなみとて、外にてのみのたしなみにては、いかでか、たしなみといふべき。內にても外にても、いかならむ所にありても、常にたしなみてこそ、誠のたしなみといふべきなれ。さなくして、斯く、內にては、汚く、荒く、みだりがはしく、あさましくの

み行ひて、外にては、殊更に、美はしく、柔和しく、正しげに振舞ひたらむは、誠に身をたしなむにあらずして、實は、人を欺き、世を欺く業のみ。女子は、常に、しとやかに、柔和しく、美はしからざるべからず。いづくにても、いづかたにも、しとやかに、柔和しく、美はしからざるべからず。さなくしては、眞實の、優美溫厚の日本の女子にはあらざるなり。內に、汚く、荒々しく、みだりかはしくして、外にのみ、美はしく、柔和しく、しとやかなるは、醜く、につくき二面の女子にて、つまりは、汚く、荒々しく、亂りがはしき女子といふべきのみ。

山はさけ　（源實朝）
海はあせなん
世なりとも
君にふたこゝろ
わかあらめやも



論說

女教師

高津鍬三郎

戰後經營は、其の事業多端なりといへども、軍備の擴張と、教育の進歩とを計るより急なるはなし。而して軍備の擴張は、既に着々其の歩を進め、西洋の諸強國をして、我が兵威を畏憚せしむるに至りぬ。教育に於いても、清國との戰爭以來、世人一般に其の必要を認めしかば、中學校、及び各種の實業學校を新設せること、戰爭前の二三倍にも達せり。然るに、この際に當りて、ひとり、女子教育の、頗る振はざるが如き觀あるものは何ぞや。

教育の進歩を計るには、善良なる教師を得るより急なるはなし。然るに、近來は、學校の設立多きよりして、何の學校にも、教師の欠乏を感せるはなく、隨て其の善惡適否を論ずるの暇なきは、教育界一般の狀態なり。就中、特に甚しきは、女教師の欠乏なりとす。抑、教師の適否によりて、教育の盛衰に影響を及ぼすことは、猶、園丁の善

惡に因りて、其の培養する草木に榮枯あるが如し。教師は實に教園の園丁に外ならざるなり。女子教育の振はざるや久し。その原因一にして足らずといへども、熟々過去の歴史を考ふれば、其の主義程度の、我が社會に適せざりしと、教師其の人を得ざりしとに外ならざるなり。曾て、歐化主義の盛なるに當り、男女交際の説盛に行はれ、女子教育の議切りに唱へられて、女子に西洋風の教育を施すことゝなりしかば、其の子女をして、この種の教育を受けしめたる者尠からざりき。然るに、其の結果頗る面白からずして、遂には女子教育を不必要とする説も起るに至り、一旦勃興したる女子教育も、殆ど挽回すべからざる衰運に陷りぬ。其の後、教育者は、其の主義を改め、學校の組織を更へて、其の振興を計れども、近年に至るまで、其の効果極めて薄弱なりとす。

熟々世の女學校教育を非難する者の言を聽き、女學校教育の結果を觀るに、女子教育の振はざる原因と認めらるゝものなきにあらず。今日に至るまで、小學校以上の女子教育は、全國到るところ、宗教家の手に歸する者多く、隨て、西洋風の教科目に依るもの多ければ、世人をして、一般普通の女子教育をも、また此の如きものなりと、誤認せしめたることもなきにはあらざるべければ、なほ、其の教員の適當なる者尠きと、其

の教科の宜しきを得ざりしとは、　不振の原因の重なるものなるべし。教會設立の女學校の如きは、其の經費も外人の手より出で、固より布教の方便に供するものなるべけれど、其の教科の、本邦女子に不適當なるは、論ずるにも及ばざるべし。余は、唯、かゝる學校にその子女を入學せしむる父兄の意を解する事能はざるなり。而して、普通の女學校に於ては、その教科の組織も、近來頗る宜しきを得たれども、なほ、遺憾とするところは、ひたすら、生徒をして學識を得しむることにのみ力を盡くし、其の品性を養成する方法を講ぜざることなり。そも〳〵、我が國今日の女子は、西洋の女子と大に其の生活の方針を異にし、また、我が國にては、男子と大に其の進路を異にして、社會に獨立すべきものに非ず、必、妻となりて、一家の內事を治め、小兒の養育を務むべきものなり。されど、高尙なる學識の必要を感ずる場合少きのみならず。その學術に上達せる結果は、却て女子の本務を嫌ふに至る者少からざるが如し。たとへば、文學に長じて、歌文を能くし、或は、小說などを作る者の如きは、多く裁縫割烹等の業を好まず。しかのみならず、おのれが學識に傲りて、其の母姉を輕侮し、其の言をも用ひざるに至る者あり。是、實に世人をして、女子の教育を嫌惡せしめたる一大原因なりとす。而して、近來女子の教育に從事する者にして、此の如き流弊を認め、裁

縫等の如き、本邦の女子に最も必要なる學科に重きを置き、外國語等の如き必要少き學科を隨意科とし、或は全然削除して、好結果を收めんことを勉むれども、其の結果、なほ、世人をして滿足せしむること能はざる所以のものは他なし。善良なる女教師其人に乏しければなり。

それ、學校に於いて、普通學科を教授するには、其の教師の男女を問はざるのみならず。學科に由りては、男子の教師を便とするものあり。然れども、女子に特有なる技藝を授け、或は女子の品性を養成するには、男教師よりも女教師を便とすること勿論なり。從來女子に裁縫割烹等のことを教へ、また、妻たり母たる訓戒を與ふるは、全くその母たる者の任となり、悉く家庭に於いてなされたり。故に、今日學校に於いて、女子教育の任に當る者は、普通の智識を有し、且、世故に長けたる母の如くならざるべからず。然るに、今日我が國の有樣にては、此の如き女教員を得ること實に難きなり。見よ、今日の女教師と稱する者は、十中八九師範學校の卒業生にして、概皆未婚の女子なり。故に、學科の教授に於いては、割合に不都合少しといへども、その形式的教授以外に、女子の品性を養成することは能はざるなり。理化學の如き、博物學の如き、孰も、實地演習の上ならでは、能く之を了解し、能く之を人に教授すること

能はざるに非ずや。人の妻たり、母たる道を敎ふるにも、いかでか、また、此の如くならざるを得ん。未、妻たることなくして、夫に事ふる道を敎へ、母たることなくして、小兒を育つる法を說き。一家の經濟を掌りたることなくして、家政を講ず。これ、實に、疊の上の水練に異ならざるなり。いかんぞ好結果を奏することを得んや。特に、吾人の、方今女敎師に就いて遺憾に堪へざることは、完全なる家庭の敎育を受けざる者少きことなり。そは、いかにといふに、師範學校に入る者、大抵寄宿舍に居りて、一種特別の生活をなし、暑中休暇などには、家に歸ることあるも、その父母は、之を客視して、平素の鬱を散せしめんとにや、大抵の我儘勝手を見許して、毫も訓戒を加へざる者多きが如し。而して、生徒も、また、おのれが嗜好せる讀書等に耽りて、家事を顧みざりし者、今までは多かりしが如し。かくて、尋常師範より高等師範に進入すれど、益〻寄宿舍の生活を重ねて、家庭に遠ざかることいよ〳〵甚し。されど、その卒業後には平生の擧動も、何となく世間の婦女に異りたるところ現はれ、その思想も、また、世間の女子と同じからざるものあるに至る。是、自然の結果にして、敢て怪むに足らざるなり。これらの欠點なき、老功なる女敎師を得んとするも、其の人容易に得べからず。偶〻あれど、時勢に暗くして、普通學科の何たることをも解せざる者

なり。善良なる女教師の得難きこと、それ此の如し。されど、今日女子教育の隆盛を計らんには、先づ、善良なる女教師を養成せざるべからず。而して、之を養成するには、如何なる方法に依るべきか。惟ふに、多數の人をねんとするには、今日の如く、師範學校に依賴するより外に策なかる可けれども、たゞ、前に述べたるが如き欠點を補ふには、寄宿舍の制度を改めて、陰に、陽に、女子の特性を、益〻發達せしめんことを勉むべきなり。世の女子教育に留意する諸君、以て如何となす。

女子教育一斑（五十二）

三輪田眞佐子

本邦歷史　大和民族が、如何にして發達進歩せしか、その國體は如何、その民心は如何と悟るのみならず。世の治亂興敗、人の榮枯盛衰などの因果をも知るこそ、本邦歷史を修る目的なれ。まことや、わが民心を統一し、支配するものは、儒教か、知らず。さりとて、露だに、佛教、及び耶蘇教などの關するところにあらず。唯、固有の歷史こそ、日本國民忠孝愛國の型典なれ。

蓋、一國の風教は、家庭より起るべきものにして、一家の主婦、よく本邦歷史を讀みて會得せんか、知らず識らず忠孝を教へ、門族に節義を勸め、日本主義を發揚するを

得ん。思ふに、歷史を經典的に授くるは、敎師の責任にこそ。區々たる枝葉の穿鑿に時間を消すは、女子敎育に何の益かやはある。

其の他の學科　普通敎育を以て目的とする女學校にありては、以上七箇の科目を以て主なるものと知るべし。その他の學科とて、その効能を擧ぐれば、各必要なれども、悉く兼ね修めんとするも、歲月、及び事情の免さゞるを如何せん。さりとて、一切他の學科を顧みざるときは、智能の圓滿ならざる恐あるを以て、その概略は敎授せざるべからず。おもふに、小學にて、幾分か普通學の智識を養ひしかば、今更概要を敎ふるにつきては困難なかるべし。

理科は、文明の衣食住に大なる關係あるものなれば、日時の人事に必要ある理科の智識ばかりはなかるべからず。されば、そは、わが東洋に發達せし學問にあらざれば、勢、わが國民、わきて女子に、その思想乏しきをもて、そが缺點を補はざるべからず。されば、高尚なる學理は、女學校の程度にて修むべからざれば、古井に入れば窒息するとか。雷鳴のとき巨木のもとに據るなかれとか。澱粉質は如何なるものか等、總て直接に、生活上必要なる應用を敎ふると同時に、自修しがたきものなれば、異日自修の豫備として例を擧ぐれば、礦物學上の結晶とは如何なるものなるか、化學上の酸化と

は如何なるものなるなど、主なる學術語を能く知らしむべし。そは、一家の主婦となる後、時の必要に應じて智識を得るに足らむ。

今日は、女子とて、世界に於ける日本の地位を知る必要あれど、西洋史の大畧をも知らしむべし。これらは、讀書力だにあれど、自修も難からざるべし。唯、發端のみなりとも、學校にて開くべし。

地理も、日本は勿論、世界の主なる國につきて、その大體を知る必要あり。そは、見聞狹き女子の短所を補ふ一端にもならむ。なほ、兒童を教育する母を見るに、地震とか。風とか。將、潮の滿干とか、總て地文學上に屬する現象につきての質問を受ること多ければ、地文の大意をも心得べしと信ず。

文字は、もと思想の符號なるにより、鮮明に記すること肝要なれ。まして、筆跡は、美術の趣味をも含ひとさへいふものあるのみならず、麗しき書翰などは、人の氣をひくに足れど、習字なおこたりそ。

音樂と女子と因縁多し。音樂も、亦、忽になすべからず。なほ、これらにつきては、拙著女子の本分を見ねかし。

實際、わが國現今の情態は、學校と家庭との一致なきを以て、音樂なども、學校にて(フ

ルガン)を學ぶも、家庭にかゝる樂器を供ふるもの少く、從ひて、餘力あるものは、琴の稽古をなすめり。勿論、わが國の樂器は、その性質、學校などにて共同の奏樂に適せざるより、かゝる次第となりしにや、兎も角も、學校にて學びしものが、家庭にて應用し得ざるは、無益のわざなるこそ遺憾なれ。なほ、一般の家庭を見れば、茶と花の道ばかりは、心得べき風習なるを以て、おのれは、さながら、理科の名を以て、物理化學は更なり、動物、植物、及び礦物學さへ兼ね教ふる如く、美育科の名を以て、これらに類するものを包括して、諸の智識を與ふべしと思ふなり。蓋、廣く學べば、得ること淺きは自然の理なれど、家庭と相待ちて、大成を期する外ぞなき。

體操は、動作を整へ、姿勢を正すこそ肝要なれ。すなはち、粗暴なる動作を靜肅ならしめ。柔弱にして、あるは胸を縮め、あるは頸を垂るゝ姿勢を矯正しながら、適當なる操法と遊戯とを授くべし。

外國語は、如何。おのれきく、英語は、商業に用ゐるは更なり。廣く行はるゝより、世界語ともいふべし。獨乙は、學術に精しきを以て、近來の學問を修めんには、是非とも獨乙語を知るべきなりと。又、歐洲上流の交際には、佛語専ら行はるゝとかや。されど、これまでのわが女子社會に於いては、いづれの外國語も必要なかりけり。なほ、

今日もなきが如し。これをもて、おのれは、必要なき外國語を學ぶは、如何と思ひて、女學英語の尤も盛なるころ、反對の意見を公にせしことありけり。

されど、今日は、内地雜居も近づき、既に男子の間に於いて、英語學は、殆ど通例の學問となりぬれど、女子も、男子との關係、及び日時の必要上、せめては、英語の綴字、及び流用の名詞を知り、たとひ、字書に由りてなりとも、平易の記事などを讀み得る位まで學ばむか、幾分の便利はあらん。されど、人事は、なべて必要より起るを以て、女子にも、英語の必要あるに至らば、進みて學ぶならむ。

思ふに、英語を自在に讀み、彼の國の智識を直接に得んとならば、そを數年間專修せざるべからず。故に、普通の女子教育に於いて、英語もて智識を得るばかりの力を養ふは、望むべからず。唯、一端を知るに過ぎずかし。されど、專門に、歐米の學術を研究せんとする特別の女子は、おのづから、おのがじゝ、外國語を學ぶべし。

以上の學科を敎ふるを以て、女子中等教育となすべし。世の文明となるに從ひて、各府縣に少くとも、一個以上の女學校起るべきなり。さて、その卒業年期を三ヶ年と定め、これに入るには、現今の高等小學校卒業より連絡せば、十七才にて卒業するを得ん。これより、世に出て、良妻賢母の實を擧げんか、ゆかしきことにこそ。

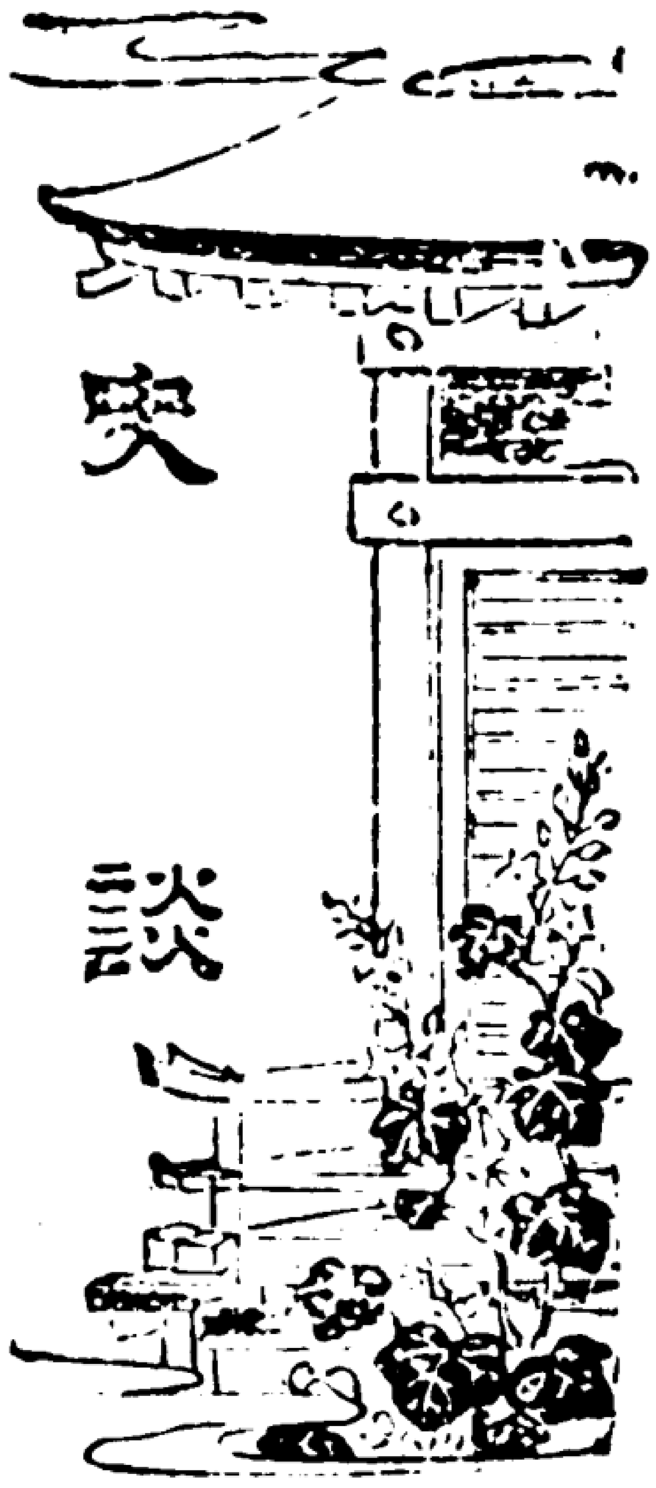
元來、普通の女學校は、良妻賢母の實質を養ふを以て目的とするものなり。若、學事を以て、生活を營み、若くは學術を專攻せんものは、特別の教育を受くべきなり。そを假りに、女子職業教育、及び女子高等教育となん名づく。蓋、この二教育とて、女子の品性を高め、美德を養ふは勿論なれども、唯、その外に、特別の目的を有するものと知るべし。故に、これまでものせし女子教育につきての義理は、特別教育を受くる女子にも適用すべきなり。

女子職業教育は、教育事業に從事し。あるは手藝を以て生業を計らんとするものゝため、これに堪能なる技量を養成するにあり。從ひて、この目的に適當する二種の女學あるべきなり。

女子高等教育は、文學、美術、音樂、醫學、及び理學など、女性に、理論上、及び實驗上相應なる學術をも、既に普通女子教育の學力を有する以上のものを撰びて、專門に攻究せしむるをいふなり。思ふに、女子教育の進歩と共に、早晩、かゝる專門學校も起るならむ。これ未來の豫言なり。

右二種の教育につき、おのれの愚見を詳密にものせむやと思へども、本著の主眼は、尋常女子教育ともいふべきものにしあれば、わざと省きつ。唯、おのれのいふ尋常女學

校の性質、目的、學科の種類、及び程度、並に他種の女學制度との關係、又は差異を明にせんためなり。讀者その心してよ。されど、女學の主意を全うするは、教師その人を得るにあり。もし、教師その人を得ざらんか、完美なる學制も畫餅に異ならずかし。



圓珠尼

鹽井ふく子

烏にも反哺の孝ありとかや。まことに孝は百行の本なり。こゝに、おのれが緑の黒髮思ひたちて、夫の心をひるがへして、孝の道にかへらしめたるめで度女こそあれ。圓珠尼これなり。圓珠尼と聞ゆるは、上野の國利根郡沼田邑に住みける河田四郎と云ふおやしきものゝ女ときゝしのみにて、何と呼びけんその初めの名は聞えざれど、其の志操の高尚に、天ざかる鄙に生ひ立ちて、誰敎くともなけれど、敷島の大和歌など好むまゝに、その作る大和錦もいと多く、「立田山紅葉を分けて入る月の」光りの如何で

かりすみ亘りけん、百敷の大宮にさへ聞えて、やがては天聽にも達し、上野の沼田の里に圓なる珠ありとさへ、時の帝にわたらせ給ひし正親町天皇の御製さへありしと聞くかしこさに、やがては圓珠と改めて冥加としたりと聞くもありがたき事なりかし。

尼、まだ若草のわかき折、みすゞかる信濃の浪人、陶田彌兵衞、老いたる母の信州に殘しきたるがありと聞けど、年月ふる事三年にもなりたれど、一度もかつて音信せず、安否如何にと思ふ心もなく、たゞ世を昨日明日と送りぬるに、圓珠あさましう思ひて、をとゝしの先きつ年より、母御は如何ばかりあこがれ給ふらんなど、事によせて云ひ出れど、さしたる答へもせず。をく霜のしろきを見、白雪の深きを見ても、さては姑御が頭、かくばかり白くもなられしならんなどそゝのかし云へど、夫は更にふる里をなつかしとも思はねば、いとほしとも思はず、あすか川流れて速き年月を、大方は山に獵し、河にすなどり、日高きも知らでいねくらし、曉までもあそびあかせるも、月花にうかれてのすさびの上のみにて、世をたゞ遊びくらし、遊び明しのみするに、圓珠はいとゞ卯の花のうき事に思ひて、諫めし事三度にもあまりたれど、夫は耳にもかけざるに、此の上は、我が黒髮をたちて、佛神に身をかけ、夫が心をひるがへさんものとて、遂に世を思ひたち、或日、夫が色を伺ひ、兼ねてしたゝめをきし一書

をもち出で、前にさしおきて見せけるは、それ三綱の中、親子の道第一なり、又、孝は百行の本と云ひて、本立たずして末の全きものを聞かず、然るに、此の三年が程なれまゐらせて、つら〳〵君が御心を伺ひ侍るに、御老母の御事つゆ思ぼし出し給ふ事もなく、たゞわけくれ遊興、殺生、放逸の擧動のみに、あたら月日を送り給ふ事、天命にもそむき、神佛にもにくまれ、如何なる罪をかうぶり給ふらんとぞんじ侍れど、行末の空いとゞおそろしうも、歎はしくも侍り、かく異見たて誠におこかましうは侍れど、君もむかしは武士、かねてひきならし給ひしあづさの眞弓、ひきかへし、孝子と呼ばれ給はんことを、偏に、〳〵願ひまゐらする。さて、妾、誠に自由なる願事なれど、只今より長の御暇たまはるべし、さるはつゆ忌心侍るならず、たゞ後の世を願ふの志深く候へど、今より髮をそり、如何なる山へも逃れ入りて、佛に仕へたてまつらまほしく思ひ侍るなり。一樹のかげさへ他生の緣ときくものを、とにも角にも三年が間の御惠み、ゆめ〳〵おろかに思ひまゐらせず、陰ながら御冥加の程は必ず御祈り申すべく、返す〳〵御心善道にうつり給はん事のみ偏に願ひまゐらせ候と、筆もにぶりがちに、涙ににじみたる跡さへあるに、彌兵衞もいたく感じ入り、げに三年が間、とばず、鳴ず、遊びくらせし我がおろかさ、今より歸りて老母へ謝せんに、汝は望にまか

すれど、心安く、志をとげよとて、其のまゝ速に信州に歸りけるに、圓珠はみづから設けし事ながら今更に悲しく、あやめもわかず泣き別れけるが、やがて出家して、圓珠尼と名のり、道心堅固に行ひ、念佛怠らざりけり。夫彌兵衛も妻女が世をたちての異見、如何ばかり身にしみにけん、歸りたる後は、老母へやさしく、朝夕のつとめ怠らず、かしづきつかへ、一家親しく、よろこびて老母が冥目したりし後も、なほ、養ふの期の少かりしを悔やみかこつばかりになりたりとぞ。

かくて、尼、老いて後、瀧川左近將監一益、此等の事を聞き及び、床しう思ひて呼び出し、ねんごろにもてなし、かつかね〴〵聞及びたる歌人なればとて、二三四と云ふ題を出して、歌をぞ望みけるに、圓珠もむかしに立ちかへりたる心地、苔の袂をうらがへして、

　如何にせん戀しき人の玉章によまれぬ文字の二つ三つ四つ

と罪なき笑と共によみ出しに、一益、いたく感じて、引出ものかず〳〵つかはし、人をさへそへて沼田まで送りけりとぞ。

　立よりて影もうつさず流れてはうき世に出る谷川の水

こは尼が深き道心を流したる歌なり

いとよわき梅の匂ひの花衣春より先きにほころびにけり

石墨に硯田そへて筆もがなとがみにかきて君に見せむや

是は石墨、硯田、戸上と云ふ所の名をもてよめるにて、そのいみじき才のほど思ひくまるゝなり。また當座物語を書て、人を慰めけるは、ある山寺に艶なる兒達三人まし〳〵、四十雀を飼ひ給ふ。春雪ふりて、寒かへりたるに、彼鳥空しくなりぬ。兒達はいたくをしみて悲しみにたへず、雪にて佛を作りて菩提を弔ひける。猶、和歌をもてす

雪佛つくりもあへず罪きえて落るしづくは河くだらく

つくる人みな極樂へ雪佛罪もむくいも消えてあとなし

氷をぞ座像になすや雪佛あられや玉のかざりなるらん

など、此外、をかしき文、おもしろき歌もまだ多く見ゆれど、此處にはかむかりになしおきぬ。其の後、まもなく煩ひて、逐に雪佛と消えはてけるとなり。世には嫁むかへて、親子の間あしくなるが多き中に、之は、げに、めでたきみがきたてたる珠にも、鏡にもありけるよ。

田港の乙樽

随菴

近江の八景を一つにあつめたりとも見ゆる琉球第一の名所、國頭郡鹽屋の入江の奥の方にあたりて田港村といふあり。中山をうしろに負ひ、鹽屋の港を前に控ふ、出で行く帆影に、歸る船に、喜びのゝしる水主の聲々は、鴈にまがふ楫のねと共に、遙なる峯の松風と相和して、朝夕絶ゆることなし。然のみならず、其の村だちといひ、四時の風光といひ、さながら功妙なる繪畫を見るが如く、たとへ急ぎの旅なりとも、直には立ち去り難かるべし。此の村に、今は昔、田港の乙樽とて烈女ありけり。

總て四五十の中にも、目にたつばかりいぶせげなる家に、病み衰へたる夫を看護しつつ、老いたる姑を介抱し、幼き男の子を愛育する、まだ、年弱き女あり。即、是、乙樽なり。未だ此の家に嫁入らざりし前には、妻にせむとて乞ひ望む壯者甚多かりきといへば、容姿の人に立ち勝れたりけむかし。

いと切なる心にも、繋ぎとめられぬは人の命なりけり。親や、子や、かなしき妻をば夢の中にわすれきて、二十を越えて幾年も經ぬに、夫は遂に死去りぬ。遺されし人々のなげきは、あはれ云ひ盡さるべきことか。

かねてより勝れたる心ばへは、遠近に知られたりき。世の痴者ども、或は位得たるを

たのみにし、或は富めるをほこりいひて、わが子のため、孫のためにと、人の心もれもひやらず、何につけかにつけ、再縁をすゝめ誘ふといへども、何條心を動かすべき、唯、姑を慰め、子をはごくみ、野原の業家の事、夜ともいはず勵み勤め、女の手ひとつにて、二人の上は、世の人並にも越えて物しけり。

姑なる人の、甚しく雷を恐れけるを常に心憂きことに思ひしが、雷は桑の木を厭ふものなりと聞きて、夫の存生の頃より、共々に、桑の木と見れば堀ちとりて、家の周圍にうつし植ゑ、姑の心を安めけり。寡になりし後は、おのづから、其も多くなりて、低く小かなる家は、桑の木にて見えぬまでになりきとぞ。斯くても、猶、おぼつかなしとてや、全く鳴りやまぬ間は、萬のわざをうちおき、側に侍りて慰め護りけり。

幾年もならずして、姑も亦死去りぬ。なくなくも村より拾餘町隔りたる代々の墓に葬れり、其の二三七日の間とかよ、晝より降りつゞきたる雨の、眞夜中に至りては、いとゞしう降りまさりて、物すさまじき折柄、閃めく光りと共に、大空を蹴破り出でたるかとうち驚かるる雷の響に、すはとて、乙樽は、桑の枝を引き折り、墓をさして走りゆきぬ。雨に濡れ、泥に塗れ、閃く瞬時の光に、やうやう路をもとめつゝ、墓の戸を押し開き、(琉球の昔の墓は、板にて家の如く建て、其の内に一門、或は一家の棺を

納むるなり）姑の棺の上に、桑の枝をかざして、嫁の御側に侍り候ふぞ、桑の樹も持ちまゐり候ふぞや、驚かせ給ふなと、いますが如くにいひ慰め、全く鳴らずなりて後に、家に歸れり。斯くして、一年、二年、三年、五年、十年、廿年、遂に身を終ふるまで渝らざりきといふ。然のみならず、紀念の男の子を守りたて、家屋敷をもよろしうし、田畠をも作り擴げて、遠き祖々さへさかやかしゝとかや。

爾來幾百年、岸うつ浪も之を傳へ、打ちそよく草木も之のことを語り。今に於いても、猶、且、博識なる村老が、唯一の得意談なり。

等しく日本帝國臣民にして、又、其の祖先を相同じうすといへども、久しく南僻に隔絕し、今に猶斯の美談あり。豈、夫、獨り村老をしてのみ、美談をほしいまゝにせしむ可けんや。

人の子の　親になりてぞ　わかおやの　おもひはいさゝ　思ひしらるゝ　（康資王母）

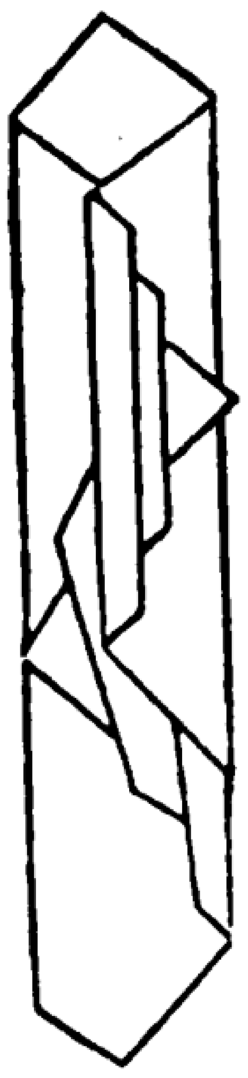


家政

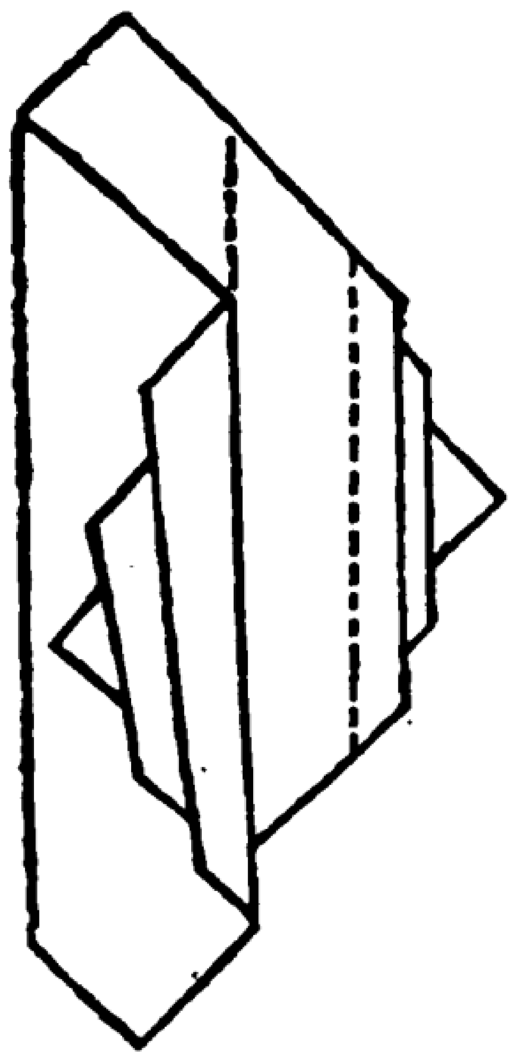
折形

有住齊

眞板の物包

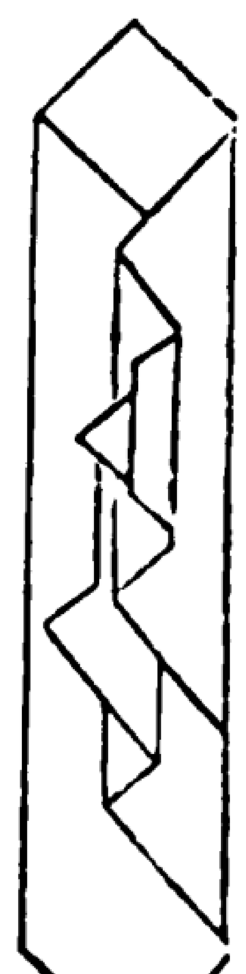


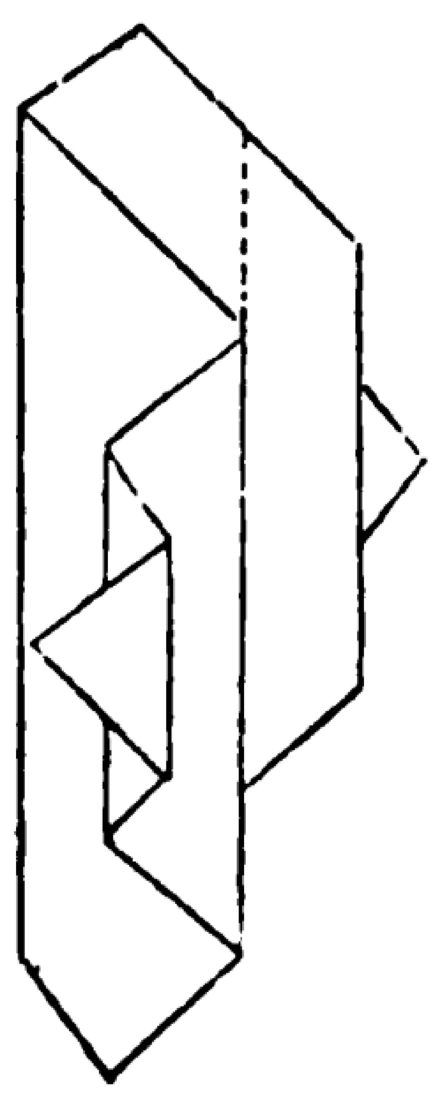
唐草織物の類を厚板と云ひ、熨斗目の類を薄板と云ふ。上書付時宜によるべし。



仝じく右を啓きたる圖

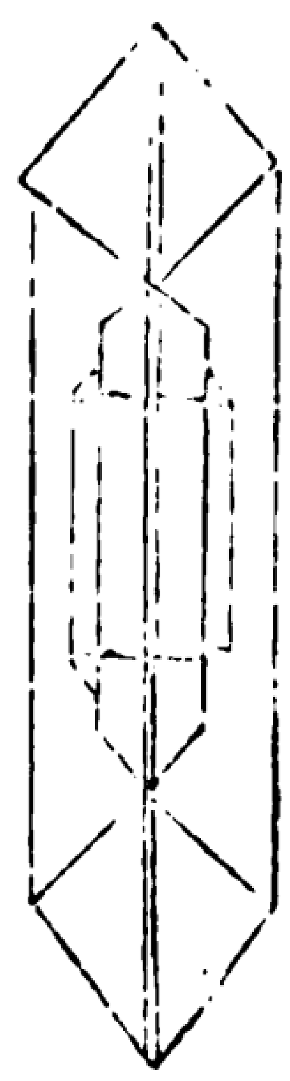
草板物包

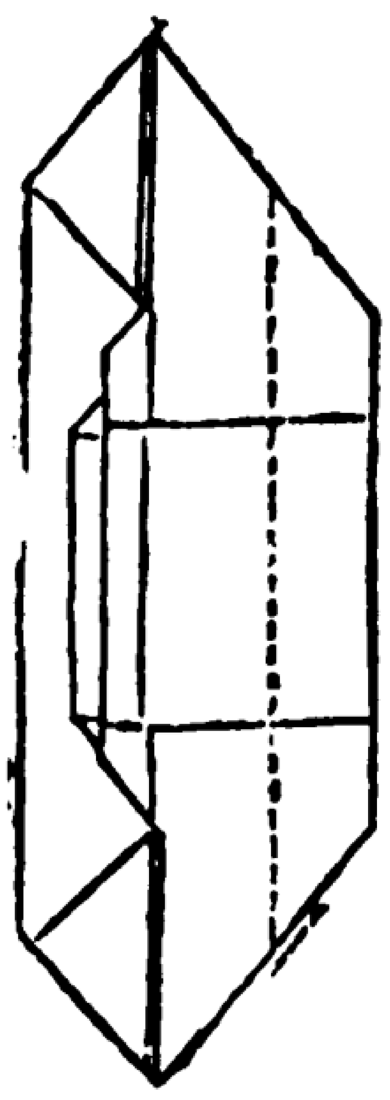




仝じく右を啓きたる圖

降帯包





仝じく右を啓きたる圖

茶の湯

薄茶平手前（續）

孤峰菴不羨
關　葦雄

其の次右手にて、直に柄杓の柄を下より持、湯を汲但汲手付は茶筌湯治の時汲に同し茶碗へ入るべし。此の時、湯加減専一也。但湯加減とは茶の多少により湯の分量を加減するを云、大約三口半を定度とす、尚口傳に譲る柄杓の殘湯を釜へ戻し、直に柄杓を釜の口輪に掛へし。此の時は、置柄杓と唱へ、拇指を柄杓の皮目の方、中節の際にて置へし。其の次、直に茶筌を取、穂先を茶碗へ入れ、左手にて茶碗を持、僅少茶碗を傾け、茶筌を振て茶を點へし。但茶筌湯治の時如く始め靜に後早く再靜に成止り左手を引茶筌は茶椀の中より引上くへし此茶筌のふり方數多からさるを良とす茶を多くふる時は茶の澁味出て大に味を損するもの也修業上達の上ならては解しかたき事なれとも能く注意すへき事なり 茶筌元の所へ置付、右手にて茶碗を持上け、左手の掌中に載、茶の點たる加減を調査し、左手を茶碗の向の方へ出し、茶碗を持、前の方へ廻し、茶碗の向を改て、右手にて客方へ出すへし。但茶碗の向と云は摸樣或は繪あるものを云疵又は繕あるものは是を客方へ向さるものなり出し處は、鍵壘炉蓋あれは其の上、釜付の方と、上座の方より、茶碗一つ丈明けて出すべし。客方飲たらは、服加減を問も可也。客も相當の禮辭有べし。客方喫間は、謹て待ち居るへし。茶碗戻らば、右手にて取て前へ持來り、左手を添、右手を少し向へ送り、呑口を右の方にして置べし、但呑口の處にて湯をこほす樣にすへし 其の次、直に右手にて柄杓を持、湯を汲、茶碗へ入へし。但此時は餘り一杯汲へからす茶椀をすゝぐ迄に止れは七八分目にて事たるへし 直に柄杓を釜の縁に掛、但茶筌湯治の時の如く切柄杓に置へし 直に右手にて茶碗を持、左手に載、茶碗の廻り茶の付たるあらば、靜に廻して是を落すへ

し。而して後、茶椀を左手に持、湯を水翻へこはすべし。此の時客方より仕舞と云挨拶あらは、左手の茶椀を右の手に持替、前に置て後、何如何を客方へ問へし。客可レ然答辭すへし。夫を聞て、右手にて柄杓を水柄杓に取、（但水柄杓と云は始め柄杓を蓋置に引時の如く持を云）前へ持來り、左手にて節の際を持右手を淺くして、拇指と、名刺指にて向へ押出し、柄杓の柄を眞横になる樣にして、左手を節の向へ送り、柄杓の柄節の前の方中程を右手にて持、水を汲、茶椀へ入べし。（但水指の眞中にて水指の水上にもあらす下にも非す中程を汲を習さす）直に釜の口に掛くる。此の時は引柄杓に置へし。（但引柄杓と云は釜の向のふちへ合の底を掛右手を其儘引き柄杓の柄拇指と名刺指との股を過たらは拇指を名刺指の方へ付名刺指と中指との指頭に掛て手を引柄の元に止り其儘置へし）直に茶筌を右手にて取割稽古の時示したる如く振そゝぎ、茶筌を元の處へ置付、右手にて茶碗を持上げ、左手へ移し、翻へ水を明くべし、直に右手にて茶碗を前に置、又右手にて、釜の蓋の上に置き有茶巾を取、茶碗へ入るべし。是も手の形に置べし。次に茶筌を入れ、次に右手にて茶杓を取割稽古に示したる如く拭ひ、茶杓を茶碗へ掛、帛紗を腰に付べし、右手にて棗を右に方、最初置合たる處へ戻し置、右手にて茶碗を持上げ、左手にて持居、右手茶杓掛たる直く際を持、棗と置合すべし、次に右手にて柄杓を水柄杓に取、持直し、（茶筌すゝぎの處に示したる故爰に掲出さす）水を汲、釜に指入るべし、二杯を規則とす。（但釜へ水を差にはだーあさ入れす靜にさろくくさ入るを習さす柄杓の合釜の縁より合だけ上けて入へし）能水を切、合を起して前へ持來り、左手に搆へ、（但最初釜の蓋を取時の所作と同し）右の手にて釜の蓋を締め、直に右手柄杓の柄の元へ添持、柄杓を眞横にして、上より持、蓋置へ引べし、右手にて水指に立掛置たる蓋を取、前へ持來り、右手の下を、左手にて持、拇指を上にして、左の方へ倒し、平等にしてはじきを持、水指に

蓋すべし、直に右手にて柄杓を持、前へ持來り、左手にて節の所を持、右手を上より持籠、(但前の處迄握りこむへし)左手にて蓋置を取、右手柄杓を持たる下に持、(但柄杓を握り込し惣の指先にて指へし)左手にて翻を持立へし、此の時斗左足より引、三足引、左へ廻り、勝手へ入る、右の類品を水屋に假置して、又出て棗、茶椀を持、(但持方等は持出る時と同)立て右足より三足引、右へ廻り、勝手へ入(但棗は上の通し棚に茶碗は茶碗棚に置へし)又出て水指を持、立て右足より引、右へ廻り、勝手へ入、簀子に置、直に宗匠へ對し一禮すべし。次に水屋に往、水翻の水をこぼし、柄杓は茶巾盥に入、蓋置は茶椀棚の端の方へ置、茶杓を通し棚へ載、茶筌、茶巾盥へ入、茶巾の疊有るを解し、片隅を取、茶巾盥へ入れ、二三遍振そゝぎ、其の儘漬置べし。次に水指へ水を足し、帛紗を治め、是にて一服の薄茶畢。

附言、客方喫茶、仕方、菓子を喰するの場合、服加減の美を賞する等の禮儀は、此章へ一時に言並ふる時は、事多端に亘り、錯雜して、大に解し難き憂あれど、次號掲出の都合に隨ひ、別に垂訓すべし。

女の禮(四)

禮節教授　有佳常子

第一　貴人に御禮申上る様

この禮は、最も古くより見ゑたる禮にして、古事記、日本紀等に、匍匐(ハラバフ)と見ゑたる禮の様なり、されど、此の禮をなしたまふ折には、心を平らかにして、ことに恭みてなすべきことにこそ

○稽古の仕様

づまゝ下座についゐて右の手、左の手、共に膝の上に肘をはりたまはぬやうに心して、また指と指の間のすきあらぬやうに、すこし手掌の方へくぼくしておきたまふべし。さて、右左の踵をつまだてたまふべし。つぎに、右の膝頭のみをもたげて、右に、左膝を疊にずらして、兩膝のみを披きたまふべし。(是は立ちたまふに安う立うるためなり)さして、披きたるとき、其のまゝに、眞直に向立たまへ、つぎに、左足よりあゆみて進みて、御前近うまゐりて、三尺ばかりこなたにて、踏とゞまり、左足を、右足より半足跡の方へ引て、左の膝より、左の手を膝頭につくやうにずらせながら、疊につき、右膝も、右の手の膝頭につくやうすらせて、疊につき、つぎに、右手膝頭に、指の甲の方にそりたるやうにそへたるまゝ、跡にすこしひきて、つまだちたる踵をおろし、左もおなじやうにして、たひらにすわりたまひて、兩の手を前に共にすゝめ、兩肘は、(兩膝の脇に、疊につけて、頭をたれたまふと共に、手をも進むるなり)、兩手の指を(禮をなす形は、人さし指と人さし指との間に指一本いるほどに、はなし、また兩の大指は、てのうちの方へ先ををりてみたまふやうにして、其の人さし指と大指とのあひだに、おん鼻のいるくらゐになしおきたまふべし、ほどようおきて、御禮申上るなり、襷を見せまゐらせぬやう頭面を平かにたるゝことわきてこゝろしたまふべし。

○禮をはりて、立かへるやうは、

頭を靜に、やゝ〳〵にもたげ、兩の手をも、追々に、膝の前に引よせて、さきのごとく、膝がしらにつけたまひて、こたみは、右を引きつまだち、左を引て

つまだち、また、右をすこしひく心して、踵をうろへて、つぎに、はしめ出立たまひし時のごとく、右膝をうかせて右にひらきて、ますぐにたちたまふべし。さて、両の手は、目立たぬやうに、膝の上の方に、指のばら〳〵ならざるやうに、すなほにおきて、まづ右の足、つぎに左のみ足と、跡さがりにさがりたまひ、つぎに、右のみあしを、引ながら、左のみ足のあとの方によこにつけたまふべし、つぎに左のみ足を、右のみ足のさきの方につけたまひて、右のみ足を踏そろふべし。さしたまひて、左のみ足より静にあゆみ出で立かへりて、さきにいで立たまひし所に至りて、右のみ足を左のみ足のさきによこに、つけたまひて、左のみ足を右のみあしのあとによこに、つけながら、めぐりたまひて、これも左膝よりつき、右膝をつきて、すわりたまふべし。

右は御稽古の時のやうなり。

まことに、申しあぐるやうは、次の席よりつゝしみて出たまひて、禮をなしたまひ、又立かへるときにも、つゝしみて、次のむしろまでも退きいりたまふべし。

○なほ、おもく申し上るやうは、別にあれど、そのくだりに、またも申し上べくなむ。

同輩に御禮の様

出るやうはおなじけれど、禮のやうは、両手の間を三四寸頭をたれ両手を出すとき肘の疊につくころをよしとす、はなして、頭も、其のやうに、疊よりはなして、禮をなしたまふべし。立かへりやうは同じことなり。

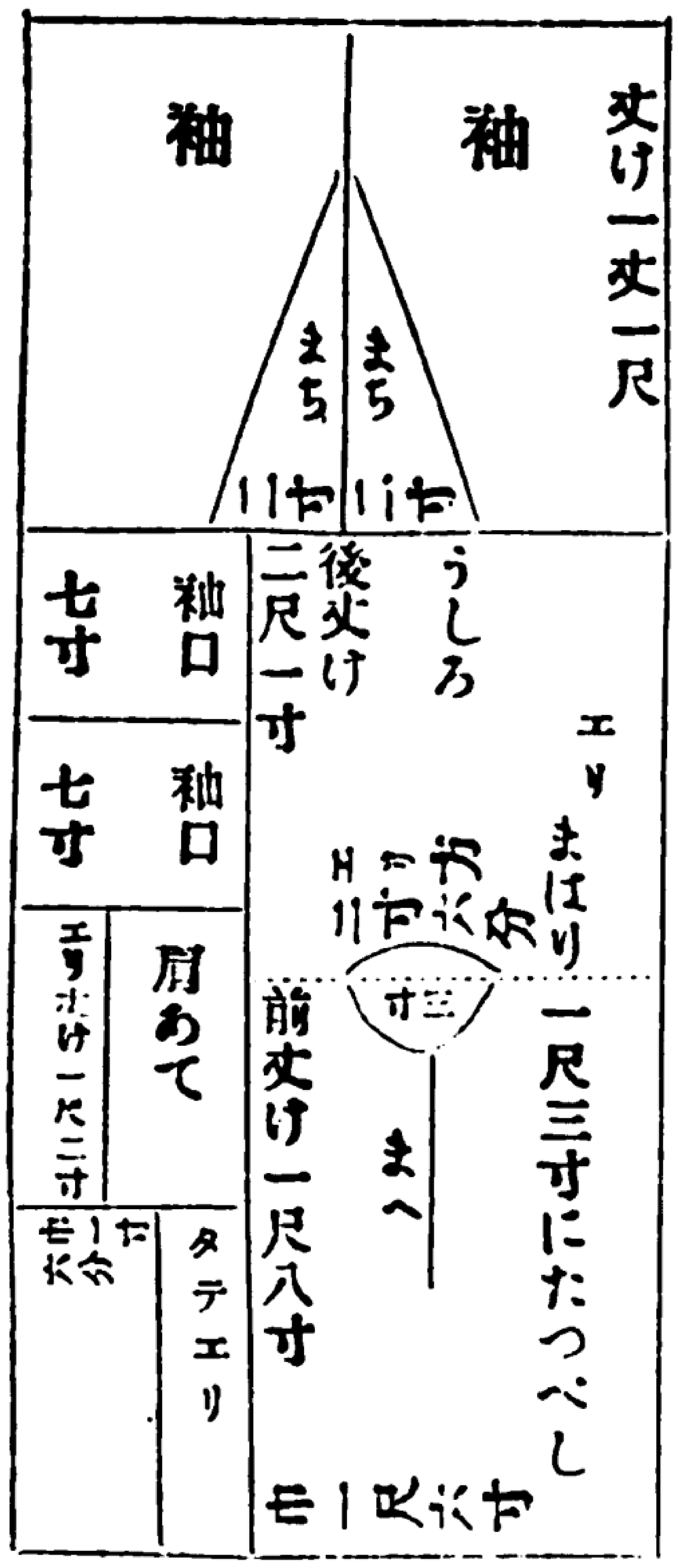
右はけいこの時の様なり。まことには、人によりて、時によりて、處によりて、夫々に、よろしくなしたまふべし。一すぢにさだめて、これのみにと思ひきたまふは、あしうはべるなり。

たちぬひ

西山たい子

（七八）シャツの裁ち方

その圖



圖の如く、まづ袖丈分をとり、圖の如く二寸ばかり斜にかき切りて、袖のまちとすべし。さて、殘りを、胴の巾にかき裁ち、後の方を三寸ばかり長く折りて、襟まはり大方一尺三寸ばかりにゑぐりわけ、前は下まで切りはなつもよし、また九寸ばかり切りて、下は切りはなたずおくもよし。胴のわきをかきたる切れより、袖口、及び襟、タテエリ、肩あて等をとるべし。寸尺は圖を見合すべし。かくすれば大方五尺ばかり要するなり。また、今少し袖をみじかくし、胴の丈をも短かくすれば四尺ばかりにても裁てるなり。そは宜しく之に習ひてたつべし。

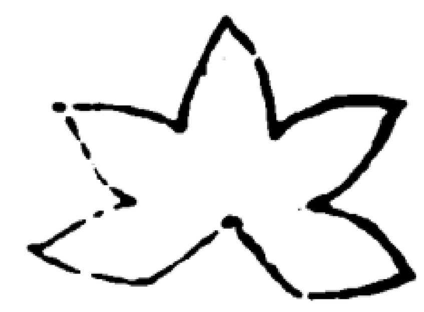
造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

琵琶

滿開花の造り方、花瓣には、白天鵞絨、又は寒冷紗を二枚合せて用ゐ、第百七圖の如き小さき形に斷ち、元を薄黄色に染め、三角形に斷り込みたる所の兩方

第百七圖



に、濃き糊をつけて繼ぎ合せ、之を蕚に着くべし。蕚は、本誌第百十九號に掲げたる梅の蕚と仝じに造るべし。蘂は、カタン糸五六本を花に適ふだけの長さに斷ち、其の先に、菓子種を「オウラミ」にて黄色に染めたるものを糊にてつけ、花の中に差し込むべし。斯の如く造りて后、蕚の元に針金を巻きつけ、縦にのばして莖の眞となし、其の上に稍々太く綿を巻き、之を薄糊にて固め、乾きたる后、茶粉にて色染し、實物を見合せて、好みの恰好に纒むべし。

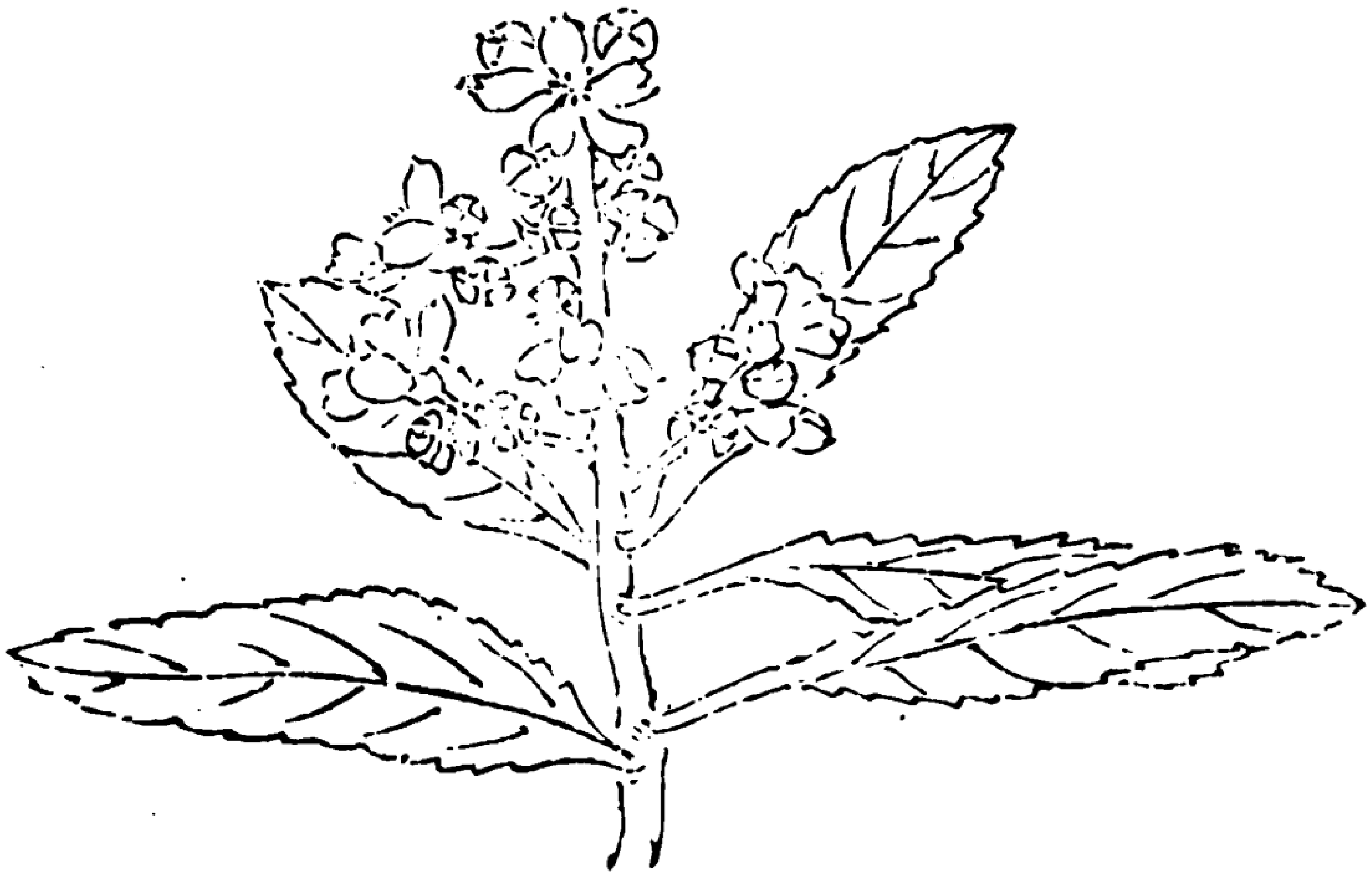
半開花も、滿開と異なることなし。唯、花瓣を少しく内部に向けて造るなり。

蕾は、半開よりも、尚、花瓣を内部につぼめて造るべし。

葉の造り方、寒冷紗を、普通の葉の色に、「オウラミ」七分「グリン」一分五厘、「マセンダ」五厘を溶き合せ、褪色せぬ爲に明礬少許を加へて染め、乾して后、其の上を「セルリン」と「レモンエルロー」とを等分に溶きたる液に染め、實物に合せて形をとり、針金に青紙を巻きて裏より着け、筋鏝にて、表より

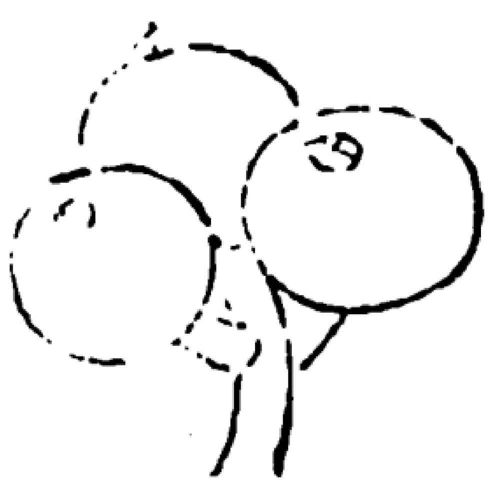
實物の通りに筋をつけ、其の筋の間々を、裏より辦鏝にて少しふくらますべし。斯くして后、之を蠟を溶きたる中につき込みて、直ちに取り上げ、能く振り廻してしたゝりを取り、稍々乾きたる頃、綿を鋏にて極細かに刻み、茶粉にて染め、再び能く乾したるものを、此の葉の裏に付け、實物に模す。造り上げたるものは、第百八圖の如し。

第百八圖



實の造り方、 太き針金の先に、實の太さに綿を卷き、之を薄糊にて固め、乾して、「レモンエルロー」を濃く溶きて塗りつけ、茶粉にて實の頭の點をつけ、葉と全し様に、蠟にて光澤をつけ、葉の裏につけたる(綿を刻みて色染したるもの)を、實の頭に少しと、莖とにつくべし。莖は花の時と全じ造り様なり。第百九圖は實の造り上りなり。

第百九圖



だいどころ

（前號の續）

「タート」を蒸燒にしたる後、其表面に氷砂糖をふりかけるも美なるものなり。其法は、鷄卵の蛋白を泡立迄かきまはし、これを刷毛にて「タート」の表面に塗り、其上、細かに碎きたる氷砂糖を篩にかけ、再び之れを竈の中に投れて、十分間程燒べし。若、揑粉に殘りあれど、之れに、糖蜜を能程に加へ、少量の桂子末を和し、能く揑交せ、薄く延ぺして能程の大さにきり、二つにたゝみ合せ、竈に投れ、五六分間燒く時は、最良の淡味「タート」を製し得べし。之れを食するには、牛酪又は牛乳杯附けるをよしとす。

牛肉「パイ」。牛肉壹斤を能く搗碎き、之れに玉葱二個を細かに刻み肉と混合せ、胡椒、食鹽を能程に和し、團子の如く圓め置、次に米利堅粉半斤を揑鉢に投れ、之れに牛酪、或は豚脂膀二十匁と、大匙二杯の水とを加へて能く揑ね交せ、一塊となし、之れを延板に少し粉をふりて其上に取り、揑粉にも粉をふりかけ、初め両手にて壓平め、夫より麵棒にて平らに延し、（時々揑粉に粉をふりて、延板と麵棒につかぬやう注意すべし）能程に廣かりたる時、四方より折返して、又麵棒にて前の如くし、二三回に至れど、脂膀、よく粉と交りて、すべてこくなるものなり。然して後、厚さ二三分位に麵棒にて延し、「パイ」皿より稍や大きく斷きり置、前の肉團子を「パイ」皿（船形の皿）に載せて、五六勺の水を注ぎ、團子を壓平めて、斷置たる揑粉にて其上に蓋をなし、蜜接せしめ、餘分の揑粉を摸型に投れて、木の葉などに形作

り之れを蓋したる揑粉の上に載せて飾となし、皿のまゝ前に示せる熱度の竈の中に投れて、今一時間半程蒸焼にすべし。

（つゞく）



學園

秀歌集（八）

壚井正男

○

時鳥今朝鳴く聲におどろけど
　君に別れし時にぞありける

○此の歌は、古今集の哀傷の部に載れるものにて、紀の貫之が、藤原のたかつね朝臣の身まかりての又の年の夏に、時鳥の鳴きけるを聞きてよめる歌なり。○おどろけど「假にふと目さむれど」といふことなり。此のおどろくは驚くことにあらずして、眠りの俄にさむることなり。○鳴く聲に「時鳥の鳴く聲に」なり。「鳴く聲におどろく」とは時鳥の鳴く聲をきゝて、眠りのさめたるにあらず、ふと眠りさめたる折りから、時鳥の聲もきこえたるなり。仝時に目もさめ時鳥も鳴くけしきなり。なほ「山里の春の夕ぐれ來て見れど入相の鐘に花ぞ散りける」とある「入相の鐘に花ぞ散る」といふも仝様の詞づかひなり。仝時に鐘鳴り花散るけしきなり。

○一首の意は、今朝、ふと目さむれど、折りから、時鳥の鳴く聲もきこゆ。思へど、げに去年、君に別れたる時であるわいといふことにて、ふと目ざめて、折りからきこゆる時鳥の鳴く音に、彼のた

かつね朝臣の亡くなりたまへるも、去年の此の頃でありしなど、なつかしく思ひ出でゝ、その人を慕ひたるにて、うちつけに思ひ出るともなつかしともいはずして、たゞに「君に別れし時にぞありける」とのみいひて、餘情になつかしき意をこめたる、なか〳〵にいふばかりなきあはれさを添へて、いと〳〵身にしみておぼゆる歌ざまといふべし。

○

みな人は花の衣になりにけり
苔の袂よかわきだにせよ

○此の歌は僧正遍昭のにて、仝じく古今集の哀傷の部に在り。遍昭は、仁明天皇の御時に、藏人の頭にて、夜晝馴れ仕うまつりけるを、いつしか、天皇は崩御あらせられしかば、遍昭は、深くいたみまゐらせて、比叡の山に登りて、剃髪したり。やがて、諒闇もあけて、世人は皆喪服をぬぎ、或は、位階など進みてよろこぶ人もあるなどをきゝて、よめる歌なり。○みな人は。「人は皆」といふことなり。○花の衣に成りにけり。花やかなる衣に成つたワイと歎息せる詞なり。即、位階など進みて、はなやかになりし人は殊更それならぬも、すべて、人の喪服をぬぎかへたるさまをいへるなり。○苔のたもと。苔の衣といふも仝じことにて、僧侶の衣服をいふ。○かわきだにせよ。せめて乾くばかりもせよといふことなり。○一首の意は、人は皆、喪服をぬぎかへ、或は位階も進みて、花やかなる衣服に成つたワイ。亡くなりたまへる天皇戀ひ泣きて常に涙に濡れたるわが苔の袂も、せめて、乾くばかりもせよといふことにて、諒闇もあけ、世人は既に喪服をぬき、

位階など進みてよろこびあふ人もあるやうに成りたれど、なほ、我が天皇を慕ひかなしぶ悲嘆の盡きせずやるかたなさをいへるにて、君を思ひまゐらす赤心の見えて、誠にあはれなり。

○

つひに行く道とはかねてきゝしかど
昨日今日とは思はざりしを。

○此の歌は、在原業平朝臣の歌にて、古今集の哀傷の部にあり。伊勢物語にもある如く、業平朝臣、病ひにかゝりて、はや心地死ぬべくおぼえける時によまれしものなり。○つひに行く道。生ける人は、終には必ず死ぬるものなるをいへるなり。○かねて。俗にいふ「前かどより」といふ如き意なり。○思はざりしを。思はざりける事よといへることにて、をは「よ」といふ如く歎息したる詞なり。

○一首の意は、生ける人は、終には死ぬるものなることは、前かどより、われも聞きて知りてはありたれども、昨日今日死ぬべしとは思はざりけるよといふことにて、げに人情のまことこぼれて、かなしくあはれなる歌にこそ。

○

やどりして春の山べにねたる夜は
夢の中にも花ぞ散りける

○これは古今集の春の部にありて、貫之朝臣のなり。

○一首の意は、春の山邊に宿をとりてねたる夜は、夢の中にも花が散るといふことにて、紛々と花ちりかゝる面白きけしきに、心うかれて、ねても、なほ、夢の中に花の散るを見るなり。花を惜しむ故に、夢の中に花の散るを見るにあらず。花のちる

けしきに、心うかれて、夢の中にも、そのけしきを見る心なり。

ふゝくろ第三稿

下田義天類評論

原文縣居翁の作

如何御暮らしなされ候や。過にし日は、御父君も御みつがらも訪ひ給へりしを、たのれ出候てたいめたまはらず。能くたのみ入候此の月歌會廿八日と定め候。題は春やまとの國を思ひてよめるといふなり。やまとの名所の春の心を思ひ遣りてよむなり。されとかすか吉野などは、人毎のやうに詠み侍れど、外の名所もてれもひめぐらし給へ。

(人毎のやうに思ひよる所を避けむとするは、歌よまむ者の第一に心掛くべき所なるべし。されど、名所のかはりたるものをとりいでて、他人とのかはりめを見せむとかまふることは如何あるべきか。安部の清行の石見式には

こびたる詞異なる名所物の異名を好むべからず。

名所はいくたびも、花には吉野、紅葉には立田、月は姨捨等なりと云はれたるよし、細川幽齋の詠歌大概抄には云へり。(今傳はる石見式にはこの事なし)げに、さる事なるべし。趣向にこそ新斬を要すべけれ。名所なり、物名なりにて、他人とかはりめを顯はさむとするは、抑末なり。歌學の正當なる教訓には非さるなり。想ふに、此の教示は、他人と同事を言ひつゝけむよりは、寧地名なりとも替へよとの義なるべし。そを詮とせよとには非らざるべし。かくいへど、餘りに辨護に過ぎたる如き感あるには似たれど、さにはあらず。凡人の敎

授せむ程の人は、必、其の受業者の力量を考へて、其の程度の適當ならむと思はるゝ所を云ふこと、先哲の深く意を注ぎたる所なり。翁の教も、亦常に然り。趣向の新斬なる事は、初心の人の能く學び得べき所に非らるが故に、せめてはいさゝかのかはりめなりともあらしめむとて、寧地名なりとも替へよと教へ給へるかと推はからるれどなり。趣向によりて地名を選ぶべきは勿論なれども、地名によりて趣向のかはれるものを思ひ起すことも、初心の間には往々あることなり。否、これ初心のみに非らず。堪能の先達にも、また往々この傾あり。彼の定家卿が

いつはとはわかぬときはの山人も空におどろく月のかけかな

といへる如き、地名より思ひ起せる趣向也。勿論この歌は古今集なる

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物おもふことのかぎりなりける

といふ歌を、其の後楯としたるには相違なけれど、此の古歌を思ひよせたるも、必竟、常磐山の地名より思よせられたる事明なり。

爲家卿が、

しら露の玉江のあしのよひ〳〵にあき風近く行く螢かな

といへる如きも然り。一首は、全、玉江の地名より、其の基礎を搆造したるものなり。かくのごとき類、あげて算ふるにいとまなかるべし。故に、翁にもこの教あり。されど、これ歌學の權術なり。第二儀也。第一儀には非らず。故に。歌學の正道には非らずと知るべし。)

いそがしくてかくのみ。彼の判のことはその內たいめに承りなむ。

第六

御ふみよろこび開き侍り。さるは御歌どもはた最中の夜の料とて、たまへより賜はせし題の歌も見も給へる（こゝの一句も語格に少し穩當をかきたり）されど、はれなる歌に侍る可けれどとて、殊に心して直して參る。題のやうも、唯闕の月といふとは異にて、路でふ事を心に思ひて詠むべきなり。さきにも申しゝは此の事なり。文字多き題は、かくむつかしくて、そを都度〳〵によまむとすれど、歌さまわろし。其の六かしきにうつりて、歌も心も屈して、いにしへ人のさまには成り難き事なり。されど、かゝる仰言などは、いなみ給ふまじきなり。外よりよしもなくすゝめ來る題を、大方によみ給ふことなかれ。おのれが方にては、この心を能く知れる人多くて、世間よりくる題にて讀む人は侍らず。

（難題に倚りて鍛練を試むる事も修業の功を積まむとする一つの業なるべし。されど、こは詠歌の口調一わたり我が物となりての後、獨學の窓の下などにある時、竊に試むべき事業なり。凡、近世の題林類題やうのものは、古歌の意を取りて、後に推し當てたるもの多けれど、中には、漢字もて一首の意味を飜譯したるが如き題あり。此の題によりて、自己の歌を詠まむとする時には、勢、其の題の注釋めきたるものにとゝまらざる事を得ざるべし。よし、能くよみ得たるとも、古人の意想を燒き直したるに過ぎず。結題と云ふものも、他事を結び付けて趣味なき題を趣味あるものに化成せしめむとの爲也。工風の範圍を狹くせむとに

は非らざる也。古人の感情を其の儘に今人の題とする時は、今人、即、作者の感情は、山上山を築き、屋上屋を造らむより外なかるべし。殊に、結題の如きは、態々其の工風の範圍を狹隘ならしめむとするもの丶如く、ひがこゝろ得したる宗匠近來甚多きに似たり。此等の題によりて、初心平常の歌の稽古をせむとす。歌がらの苦しげにのみなり行くは、當然の事と云ふべし。これ彼の第貳編目の文中に、翁の其の弊原を論破せられたる所以なるべし。重複を厭はず、再こゝに、彼の一章を抜摘すべし。曰はく。

後世歌の事云ふ人、いつれも能く古歌の心を知り得たるはなく、何とやらむ珍らしく六かしき題をいたせば、功者に聞ゑ、安きをいたせば、まだしきやうに聞ゑむと思ふいやしき心より習する事なり。云々、

とあれ。能く其の弊原を指掌せるものと云ふべし。先年朝廷の御題に、鶯入新年語といふ題を出したる事ありき。是は古くよりある詩句の題なれど、甚六かしき難題なり。故に、其の當局者中にも、鶯新年に入りて語ると訓みたる人さへ多かりき。題の訓點を誤るほど也。爭かよき歌を詠み得べけん。第一季節をも取違へたる題なり。今の新年は鶯聲をきく可き時季に非らざる事は、皆人の知る所也。是等は、全く翁の罵倒したる中に呻吟せるもの丶所爲なるべし。近くこの三四年は、其の出題の模樣を替へたるか如し。誠に此の道の幸福と云ふべし。因に云はむ改めついでに成る可くは、彼の、寄海祝、寄山祝などの如く、轉倒訓の題をも止めて貰ひ度きものなり。元來、歌の題に、轉

倒點を施す事は、假字書の不自由なりし萬葉時代の遺風なり。否、支那學崇拜時代の餘弊なり。これのみは、人の國より傳はらで、神代をうけし敷島の道なり。其の題に、支那風を墨守して、諸學發達の今日と伴はさるは、國家獨立の上より見ても遺憾とする所なり。彼の、頑固なる國學者輩が、事理の何ものたる事をも知らで。徒に古風を欽慕して、自由自在なる此の國字國文ある時代なるにもかゝはらず。萬葉集のはしつくりの口眞似して喜ぶ如きは、今、口八ケましく咎むるも甲斐なかるべし。せめて、朝廷の御題なりとも改正して、天下の歌人に其の表式を指示せらるゝやうあらまほしき事なれどなり。)これは、宗匠たる人に對する望みなり。歌よみ一般へ云ふことには非らず。されど、この望は、われ等一己の望に非らず。蓋、歌よみ一般の望なるべし。

懷紙か、短冊かと問はせらるゝ。専は懷紙ぞよき。たにざくは、いと／＼略なり。よりて、したを書きてまゐらせ候。必かくの如くならでも大方の形にとてなむ。はしも題のみにてはすゝろなれど、三いろにかきしなり。かやうの書ざまも、色々ある事なれどなり。御名はたゞ記して參るごとくかき給へ。これまへのも、某子とかいせ給ふ可けれど、某女とかく可きなれど、唯名のみ書きたらむぞ、事もなくてよかるべきなり。御紙は、さきに申しゝ染紙の侍るにや。何ぞれかしくかさね給へ。こゝにはなくて常の紙に下書し侍るなり。若、染紙侍らずど、少し繪などの有るもくるしからず。男は繪などあるにはかゝず。女房たちはいかなるかざりあるもくるしからぬ事なり。たとへど、端書にても、此の度ゐまる下書

よりは、少し上下をせばくたちてかたへに、薄、萩、又は去らぬ繪にても書たらむもよし。かくざまの物の繪は、本繪にてはわろし。いか樣にもかきちらしたるぞよき。靑きもの、色物にても、又は金銀の粉または白きごふんなどにて書きたるもよし。その中に胡粉かきがよき物也。それも、同じやうならむは手つゞなり。いづれにても二枚かさね侍るべし。



漫録

二十一代集七夕歌寄（續）

落合爲誠　寄贈

故人　藤伊季　輯

新後選集

あはぬ間の月日を何に慰めて　具氏
　七夕つめのちぎりまつらん

待ちわたる逢瀬隔つな久堅の　常盤井入道
　あまのかはらのあきの夕霧

けふと言へはくるゝも遲く彦星の　雅成親王
　行合の橋を待ちわたりつゝ

天の川ふかき契はたのめども　丹後
　と絶えてつらき鵲のはし

鵲のわたせる橋やたなはたの　長雅
　はねをならぶる契なるらん

漕かへるならひもかねて悲しきは　公雄
　雲の衣のつまむかへふね

稀にあふうらみもあらし七夕の　舒治親王
　たえぬ契りの限なければ

幾秋も君そうつしてみかは水　爲世
　雲井に絶えぬひてあひの影

秋毎に絶えぬ星合の小夜更て　定家
光ならふる庭のともし火

彦星の契絶えせぬあきをへて　通重
幾夜かさねつ天のはころも

玉葉集

久堅のくもゐ遙に待ちわびし　為家
あまつ星合の秋も來にけり

ひこほしのつま戀衣今宵たに　平為時
袖の露はせわきのはつかせ

待れつる天の河原に秋立て　安嘉門院四條
紅葉をわたす波のうきはし

庭の面にひかて手向る琴の音を　入道前太政大臣
雲井にかはす軒のまつかせ

彦星のつまむかへ舟漕出らし　山上憶良
天の河原にきりのたてれは

れもひやり天の川原を詠れは　馬内侍
絶間勝なるくもそわたれる

彦星の稀に渡れるあまのかは　大僧正行尊
岩越す浪のたちなかへりそ

何となく秋にしなれは彦星の　野宮左大臣
逢夜を誰もまつこゝちして

逢ことの年にかはらぬ七夕は　二品法親王覺助
たのむ一夜やいのちなるらん

露しけき袖をはかさし七夕の　平政村
なみたほすまの秋の一夜に

續千載集

あまのかは水かけ草の幾秋か　為相
かれなて年の一夜まつらん

七夕のふなのりすらし天の川　家持
清き月夜にくもたちわたる

彦星と七夕つめと今宵あふ　山邊赤人
天の河原になみたつなゆめ

天の川わたりてのちぞ七夕の　讀人しらず
ふかき心もおもひしるらん

天の川絶えじとぞおもふ七夕の　爲家
同じ雲井に逢はんかきりは

星合のそらの光となるものは　後京極攝政
雲井の庭にてらずともしび

七夕の露のちきりの玉かつら　有房
幾秋かけてむすひおきけん

露をきて詠むる程を思ひやれ　選子内親王
天の川原のわかつきのそら

續後拾遺集

彦星のつま待秋もめくり來て　藤原基隆
行あひのわせは穂に出にけり

天の川かは瀬の波の打はへて　赤人
我か立待しけふはきにけり

天のかは河音きよし彦星の　讀人しらず
秋こく船の波の騒くか

あまの川霧立渡りひこほしの
揖音きこてゆ夜のふけゆけは

あまのかは紅葉の橋の色よりや　源兼氏
去年の渡りもうつろひにけん

天の川秋のちきりの深ければ　輔親
夜半にそわたる鵲のはし

たなはたの秋の一夜の契こそ　師賢
けに僞のなき世なりけれ

逢ひみても恨は絶えし七夕の　六條院宣旨
稀に重ぬるあまのはころも

稀にたに逢はすは何を七夕の　爲世

としつき長き玉の緒にけん

七夕の逢瀬のなどか稀ならん　紀伊
けふ引く糸のたえぬものから

稀にのみ逢とはすれど天の川　圓光院入道
流れて絶えん物にしあらねむ

天の川ちぎりかはらす行水に　源公忠
稀に逢夜のかすやかくらん

天の川如何なる水の流れにて　平重時
としに一度そでぬらすらん

風雅集

けふははやとくくれなん久堅の　躬恒
あまの川霧たちわたりつゝ

心をはかすともなしに天の川　後山本前左大臣
よその逢瀬にくれそ待るゝ

逢ことを間遠にたのむ七夕の　隆康
ちぎりや薄き天のはころも

おもひやる心もすゝし彦星の　清輔
つま待つ宵の天のかはかせ

天の原ふりさけ見れは天の川　讀人志らず
霧立ち渡るきみは來ぬらし

珍らしくあふ七夕はよそ人も　伊勢
影みまほしき夜にそありける

大方をおもへはゆゝし天の川　紫式部
けふのあふせは羨まれけり

天の川あふせに寄する白浪は　匡房
幾夜を經てもかへらさらなむ

七夕の逢瀬は難きあまのかは　重家
やすの渡りも名のみありけり

七夕の契はあきの名のみして　後光明照院
またみしかよは逢程やなき

年を經て變らぬものは七夕の　源義詮
秋を重ぬるちぎりなりけり　（未完）

主從教草（つゞき）

諏訪忠元寄贈

後編上

自序

此の本は、奉公人の、有增をしるす。大間違ひの所御は、其の道にかしこき人補ひ給へ、又、年季奉公仕着嘶といふ本一冊あれ共、取所あり。又、取ざる所ありて、丸に用ひがたし、其の本の趣意を以て、十八丁迄にしるす、其の余は、拙が見聞の事をしるす。文字假名遣ひ等の相違は、あげてかぞへがたし。又、道理に當ぬ事も多かるべし。是は遠國より今參りの人、近鄉より這出の丁稚飯焚の者共へ語り聞せて、前車のくつがへるを見て、後車のいましめとせんが爲也。其の外を思はず。此の門の和等達のみ、披見して、他輩の披見をゆるさず。

學記にいはく、玉琢かざれば、器とならず。人學ばざれば、道をしらず。と、あり。道を知らずしては、行ひがたし。道をしつて居てさへ、行ひがたし。況やしらずしては、猶々、行ひがたし。よき道をしつて、よき行ひをいたすべし。福德安心の田地に到る事疑ひなし。たとひ、何本をよむ共、我身の修めやう、家を齊へる處の急所を心に留てよむべし。然れ共、其の急所に心を付てよむ人少なし。只輕口の面白き所ばかりを好む人多し。是は作者の本意にはあらず。作者の本意は、身をよく修め、家を齊へるによき事あらば、是を取て以て行はんとする人がほしき者也。何本をよむ共、我身の爲になる事を考へ出

さんが爲也。聖經諸子百家の書は申に及ばず、假の本に至る迄、皆身を治め家を齊へんが爲の道具也。よき道をしつて、此の世を安心にくらすべし。

此の本、名は、主從とはいへ共、主從の事ばかりにあらず。色々樣々の事ありといふ人あり。夫に間違なし。拙も、主從の事ばかり認たけれ共、夫にては理屈ばかりになつて、愚人は退屈してよまず。よまざる時は、かきたる詮なし。是は愚人ばかりによませる本なれば、愚人のよむやうにかきたるものなり。夫故に、輕口いらぬ事多し。併し、町人百姓は、此の本を讀で、主從の事をよくしるべし。又、三べんには、主從心得に付て秘事口傳の事あれば、見て篤と勘ふべし。人として人を使ひ、人に仕はるゝ事をしらずんば、よき人とはいひがたし。是によつて、主從の事はよく心得ずんばあるべからず。身を修め、家を齊へるの根本也。深く考ふべし。

天保十三寅歲四月天赦日

東都下谷金杉

壽福軒眞鏡述

幼少の時奉公に出るに三ッの品ある事

○一ッには、親貧乏して、養育する事なりかたく、是非なく奉公に出すあり。是は、親の爲我か身の爲の奉公也。二ッには、家貧しからね共、兄弟多くして、未はか〲しき片付等もなけれは、奉公に出る。是は、我か身の爲也。三ッには、何一ッ不足はなけれ共、親の元ばかりに置ては、憂いつらい事をしらず、人のなんぎの思ひやりがない故に、其の家の主じとなりし時、人遣ひ等も行屆かず、其の上おごりの心も出るもの故に、修行の爲に奉公するもあり。是は、家の爲にする奉公也。右の三ッ、品はかわれ共、同じ奉公にして、主人もわけへだてなし、

右三ッの内、一番つとめ安きは貧乏にてする奉公也。其の譯は、長き年月の事故に、至つてういつらい事あり。又、腹の立事も間々ある者也。いとまをとりて出もやせんと思ふ事も度々也。しかれ共、其の時思ひ廻して見れば、いや／＼今内へ歸りて、貧苦をし、又、兩親に苦勞をかけ、我が身も寒むいめ、ひだるい目をしやうよりは、辛抱をし堪忍をしてつとむるがよいと、あきらめる故に、大きにつとめ安し。又は、奢りの心出たる時にも、國元の貧敷事を思ひ出し、心で心の異見する塲合がある故に、大きにつとむるにつよみあり。いづれの奉公人も、主人の恩に厚薄はなけれ共、別して、是等の奉公人は、朝夕主人を拜して勤たらば、末々我が身の仕合よかるべし。若、おごりの心出來て、主恩をおろそかにせば、たとひ奉公をつゝがなくつとめぬけても、天罸にて、病氣、其の外災難來つて、末々立身も覺束なし。愼むべし／＼。

（未完）

東塢鶴聲（つゞき）

蠟昔生

俳偕歌、歌は悲しき時は悲しく、嬉しき時はうれしき詞の出くるなれど、あざれたる時は、あざるべきこと勿論也。されど、古今の、「わびしらに、ましらなゝきぞ、足引の、山のかひある、けふにやはあらぬ。」も、猿の叫ぶ聲は、悲しきものなれど、啼べからずといふべきを、わびしらにましらなゝきぞ、嬉しき聲になけ、山のかひある今日にはあらぬか、甲斐ある今日ぞと云也、今何とも思はぬ事なれども、至ての俳偕ならずや云々、もとより調べに俳偕ありて、詞にはなきことを、能く聞

わくべし。闘は手妻の如きものにて、目に見、耳に聞がたし。聞難き故に、いかなるものぞと問ふ。是を手妻にたとへん時、人に教ふるには、此の玉を、かく右の手に取り、左の手に入るふりにて、懐へ入るなりといふ。それを調べは、かく〳〵ぞと云を、かく〳〵なるものぞと、意得ても、其の手妻の早業出來ねど、人の目にみゆるなり。見ゑては、何のせんなし。見ゑぬやうにするが手輕也。手練もなしに云はゞ、只、口にいふのみにて、業の叶はぬ手妻なり。笑ふべし。

昔生云、俳偕體の歌、舊くより諸說あれど、此の桂園翁の解にて、まことに明らかになりぬ。されど、猶、たに舊說を錄して、參考に備へん。其は、桐火桶と云ふ古書に、古今の俳偕は、相傳の人至くなし。公任卿に、御堂殿問給ひしかども、遂に秘し申て、知らずと答へ申されけるとかや。古今の大事此の事也。人毎に、只、俳偕とは、狂歌をいふと心得たるばかりにて侍るほどに、小智の妨にて、至極をしらぬなるべし。狂歌げに侍れども、心得かはるふし侍るべし。俳偕と申體は、利口なり。ものを欺きたる心なるべし。心なきものに、心をつけ。ものいはぬものに、ものをいはせ。利口にしたる姿なるべし。可秘事也云々。

蘰、カツラは、もと髪にかくる蔓といふ事なり。日蔭かづらなどを、かけしがもとにて、今は添髪をも、カヅラといふなり。又云、ツヽラは、元來、蔓ある物を、すべていふ名也。これを、古へ髪にかざせし故に、カヅラと名付たり。カミツヽラなり、カミは上也。故にカミノケといふ。

天仁波自得、世に古文學を唱ふる者、天仁波の事を説に。ゾといへば、ルとどめ。コソといへば、レとどぢむるをのみ、専らいふめり。こは天仁波のいとちひさき物にて、たとひ違ひたりとも、事の意をあやまつ事なし。天仁波は、さる鎖細のものに非ず。たとへば、花を折るといはんを、花に折るといへば、紙などを、花の形に折るやうの事と聞ゆ。實に雲泥氷炭なり。かの、ゾ、コソ、の違ひは、花ぞ散けれ、花こそ散ける。といふても、花の散に差ふことなし。さるを　かの鎖細なる規格にのみ縛せられて、此の大段を忘るゝより、よみ出る歌、かきなす文、聞ねざるに至るは、淺ましからずや。此の大段の天仁波は、凡人生れて、漸くものいふより、日に夜に修練し得て、寤寐にも露たがふ事能はざるものなり。

昔生云、天仁波の學は、抑言語ありて後に興りたるものなれば、則、本説の如くなれど、此の大體を自得したる已上は、語學も亦必要のものなり。そは、雅言あり、通言あり、俗言ありて、内外の言語、複雜なる今日に於いては、語格をもて、正さゞるを得ざればなり。

詠歌の論、詠歌のしらべのたがひ、天仁波の差ふを、いかにといふに、是平日にたがひて、衒ふが故なりといはんか、さらば、平生人を欺く人の詞にも、悉く語調とゝのひ、天仁波のあへるあり。さらば、平日の心にたがふとも、是、又、調の合ふべきものなり。これを工夫すべし。さて、平生僞りなきものかといふに、其の平日の行ひ、應接、すべて禮による。此の禮といふもの、天道に根ざすものなりと雖も、人道の上なれば、天道より見

る時は、大よそ僞欺なる事を免れざらんか。たとへば、物を贈るに、輕少といへども、受る人、これを過分なりといふ類ひ、皆眞實ならず。されど、平日に違はぬ所、やはり僞り來しと知るべし。歌は天道にかなふものなれど、平日の衒ひ飾る所を、捨べきものなり。さはいへ、禽獸の心に習へとには非ず。天心を知らん修行こそ專要なるべけれ。然れど、歌よむは、しらべしらべて、天道に叶へんとするなり。未だ調べとゝのはざるは、天道に至らざるなり。歌よむ人よりは、常の應對などは俗人のかた、至て巧者なるものなり。されど、巧者なる歌は、俗調凡調にして感なし。故に、誠を本として、智慧を捨てよといへり、是禪定の事のみならず。天地の感動こゝにあり。

昔生云、頓阿法師の水蛙眼目といふ書に、これと相似たる意味の一章を引たり。其の章に曰、京極中納言入道殿、鎌倉右大臣家へ、書進せられたるものにも、愚なる親の庭の敎とては、歌は廣く見、遠く聞く道に非ず、只心より出て、みづから悟るものなり、云々といへり。因て茲に附記して、古人の卓見を示す。

旋頭歌、　上つ代には、五言、七言、七言。の歌を、專らいへり。古事記に、これを片歌と云ふ。日本武尊、甲斐國酒折宮にて「ニヒバリ、筑波ヲ過テ、イク夜カ寢ツル」と詠し給ひしをり。燒火の老人なる者、「カヾナヘテ、夜ニハコヽノヨ、日ニハトヲカヲ」と、つけて答へ奉りしを始とせり。云々、其の後、其の三句の歌二つを本末として、一首によめる歌あり。後にこれを旋頭歌と名づく。右の三句もて云終り、又、更に始の如く五七七の言を旋

らしいふ故に、しか云なり。萬葉七、「春日すら、田に立つかる、君はかなしも、若草の、妻なききみか、田に立つかる」、猶 と多し、昔生云、此のカヽナヘニを、眞淵翁は、考の意に解かれたれど、守部翁は、○○○日日並ての意なりといはれたり、從ふべし。

紅葉のたびの記（つゞき）

佐々豊水寄贈

八日　けふは、淀の川舟にて大阪に下る日なれど、此のごろの雨に水かさまされど、舟もかよはぬよしにて、むかひの舟も來らず、今一夜此處に旅枕を重ねよといふ。宇治まではさのみ遠くもあらねど、行てみよかしとそのかされ、午過頃より出立て、桃園のほとりをあゆみ行、今日は、御香の宮さい禮とて賑はし、提きれて道も行來ならざるよし、わき道をゆくゆゑにや、二里餘りも宇治へはあらんといふに、むねうちつぶれぬ。秋日ほどなく夕陽にかたふきぬれど、あとへかへらんも口惜くて、よしやくれぬとも、宇治までは行てみんと、たゞいそぎにいそぎて、やうやう暮ちかきころ宇治の里にたどりつく、橋もむかしのは絶えてあらたにかけし橋を、平等院まではゆかで、扇の芝ばかり、そこそこにみて歸る、くやしきことになん。それより通圓が家にてやすみ、河のおもてをみわたせど、夕月の影波にうかびておもしろきけしきなり。小島の色はかはらじをと物語にいへるも、此所にてやあらん。伏見までは、道のほど遠けれど、もどりは舟とおもひしに、河波高ゝみゆれど、あやまちあらんかと、駕をかり求といへど、にはかのことなれど、此人數にはたらず、つきそふ

こたちあゆみかねて、からうじて伏見の里に、亥にすぐるころやう〳〵たどりつきぬ。あくれば、

九月九日　けふはいとよく空晴て、川水も落しかば、むかひの舟もくるよし告しらすうれしさ、伏見を出立んとするころ、朝山かげ隆より、旅のことほぎ、重陽（九月九日）なりとて菊の花にそへて、三十一文字の詠歌をおくる。その詞に、重陽ふしみの里にて菊の花を奉るとて、

千年ちよ君やくみしる呉竹の
ふしみのさとの喜久のさかづき

又

旅なれぬ夢やいかなる呉竹の
ふしみのさとのかりまくらして

長月九日、御發輿を祝奉て

君やけふ旅行みちのすさみにも
千代つみしらん菊のいろいろ

御出船を祝奉て、

西の波や海しづかにてはらからの
ゆくへ幸ある舟出とぞおもふ

とあるを、とみにかへしせんとおもふも、船出するにひまどりてはいかがあらんと人々いひののしれば、心ならずもほどへてかへし侍るをこゝにしるす。

九月九日伏見の里を旅立けることほぎ、かけ隆のもとより、菊の花にそへてことのはをおくるかへし

今日こゝにくみみんとしも思ひきや
めぐれる千代のきくのさかづき

手折こしきくのいろいろ旅のやどに
うつらふまでもあかずこそみれ

旅なれぬ夢やいかなるとあるにこたへて

いとやすく伏みのさとのたびまくら
むすびならはぬやどりながらも

己にちかきころ、小舟にのりて淀の橋まで行、それより河御座といふにのりうつりてみれど、船中もゆるやかに覺えて、歌山はじめ、みなみな此の船にのりぬ、空もくもりなく、風も音せぬ河つらのけしきいふもさらなり、きのふのうさもわすられつゝ、重陽なれど、供の男女うちかたらひ、れはみきくみかはし、終日わそびて行、

淀がはのよどむともなくくみかはす
けふのまとゐのきくのさかづき

と、うちずんじて行く。左にみゆるは、かつらぎ山ときゝて、

かつらぎや高まと山をよそにのみ
みてこそすぐれよどのかはふね

夕つきのかげもうかびてゆくふねの
なみぢたどらぬよどのかはつら

こころよろこびしさのまゝ、言の葉の數を書つけ侍るも、かたはらいたしや、酉にすぐるころ難波につく、まづこのかみの旅のやどりしたまふ御館に行く、めづらしき所の對面のうれしさ、四方山の物語もつきせねど、亥の刻ばかりになる、やがて我ためにまうけたまひしやどりにつきぬ。

十日　けふはとう留したまひけるゆゑ、何方へも行ず、ひるのうちむかふの御館にまゐる。

十一日　けふは大阪發駕したまひけるまゝ、午の時まではみづからのやどりにゐる。此のやどりへ立寄出立たまふ。未の時こゝより、平野屋何某が別業、逆櫓の松の茶屋に行、雨そぼ降つれど、舟にて行、程近所にて、つかのまにかの岸に舟もつきぬ。さま

ざまもてなし、輿じて亥にすぐるころまであそび、また舟にてかへる。

十二日　けふはわきて空もはるれど、いでや住よしへまうでんと、朝とくいづるはづなれど、ひまどりて巳にすぐるころより出る。けふも、舟にて行、住吉までは舟路もほど遠ければ、秋の日のならひはとなく、未の刻ばかりやうやう住吉につく、ここかして拜みめぐりて、茶店にやすらふ、萬代の池をみんといへど、道のほど十七八丁もあらん、日も暮なんといへば、心のこしてかへるさ、相生の松はたづね求てみる。いにしへのは枯て、植つぎけるよしなれど、是も老木となりて、木高く枝葉茂りてぞみゆる。千本の松のかげより、夕月の光さやかにてらして、堤を行に鈴虫のこゑもふりせず、左右に聞えて、これや難波堀江ならんか、また舟にのりてかへる。

ところから月もこよひはすみの江の
　　にごらぬなみにかげをやどして

舟路もはるかなれど、子の刻ばかりにかへりぬ。

十三日　けふは乘船ときはめし日なれど、さまざま旅のよそひしけるに、申の刻すぐるころになる。例の川舟にのりて行く雨も降ぬれど、道のほど舟の中いぶせく、やうやう暮すぎて、鳳麟丸へはのりうつりぬ。こよひは船出さず。

十四日　空晴てしはあひをまち、夕つかたは船出きなんといへど、入船多く、あやうしとて、此のみなとにこよひもあかしぬ。

十五日　明ぬまに船出侍る、川口のほとりにて夜はあけぬ。追風なれど、眞帆にかけてゆく、山々みゆる。淡路島もめちかくみえて絶景なり。とりかぢのかたも明わたしつつ、四方をながめてゆく、須磨寺

も木かげにいささかみゆる。舞子の濱の松のけしき、ゑもいはれず。灘もやすやすすぎて、心よろこびぬ。今夜は月もさやかなれど、夜とともに行。

十六日　明はなるゝころ目覺てみれど、このかみの御船もむかふにみゆるうれしさ、朝のほどは帆にて行、ひる前よりは風もなく、おし船にてひつじには速きころ備前牛窓にかかる、しばらくありて、波なし、丸も此のみなとにかかりたまひければ、御供の船も數多賑はし、みづからの船へも誰かれとぶらひ來りてよろこびあへり、其夜しのびて、御船のほとりへ船をよせ、對面じ侍りける。はからずも、おなじみなとに船かかり侍りけること、よろこびかぎりなし。

水のあらび

井上頼文

さんぬる五日、越の國中うちひたし、さかまき立ちし洪水は、いともいみじきことなりけり。名におへる高田町すら、百四十餘年このかた、いまだゝめしなき浸水にあへりき。そのすぢのしらべによれど、此の町のみにて、水に浸されたりし家屋は二千二百五十五戸、橋梁の流れうせにしは二十架、そこなはれし、段別は百六十町にあまりきとなん。

こたび、山岸のみづあきらぬしより、其の時のありさまこまやかにいひおこされつるふみのはしに、しるされたる歌あまたあり。よみもてゆくに、月花の題詠とはしなかはりて、みなことごとく實況なれは、いひしらぬ無限の感情言外にあふれ、あはれさ身にしみてなん。いまその中のを、いさゝか左に、

あら浪に山田のをしね埋れて
　見わたしひろき越の國はら

たなつものあとなき小田に立つかゝし
　あすより何をもらんとすらん

はかなくも枯れし稻葉にひきかへて
　茂るは民のなげきなりけり

山田もるかりほのいほもなかれけり
　いたくな吹きぞ秋のはつ風

この秋のみのりいかにとたつ田子の
　たもとかすめて秋かせぞ吹く

せきあへぬ涙はせとて秋風の
　ふくかふせやのしづが袂に

賤の女はつゞりさせてふ虫の音を
　あれたる宿のとこにきくらん

籬のくされけれど
秋ごとの虫に宿かす草むらも
　あはれあとなくなりにける哉

をりにふれて

いかにしていかにしづめん雨につれ
　風につれつゝさわぐこゝろを

入院録

西海坊

おのれ、八月朔日の夜、いたく咯血したれど、驚きて、まだよひながら、明けぬる夜をも、三夜ふた夜かさねつる心地して、三重縣私立病院にいたりて、直に診斷をこひぬ。今井院長は、こはよろしからぬ病とのみいひて、病名をつゝまれたるは、病の重きが爲か、池上醫長の命じたまへる儘に、入院す。こは、あまりのつれ〴〵

にたへかねて、かきつけしものなれど、いとこちたくなん。

はらたゝしきもの

「燈」のきえなんときは光るなり人死なんとて氣みじかくなる」げにさるものなり。されど、こは、かたみに忘れきぬれど、おいひいでさるもうべ、少しころよきもの、三たり四人打ちつどひて、夜いたう更けぬるまで、あらぬたわげごとなどいひしろひたる。まはり醫のいと横柄なる。看護婦の「ブライベリー」によりてけぢめするなど、いとこそはらたゝしきものなれ。

うれしきもの

院のをさの、いとよくねもころに診みられたる、友垣の中らひより隔なく、しかなすな、かくせよなど、こまかにいひふくめたる手紙のつたきる。看護婦の甲斐〲しうもてあつかひたる。退院の日のちかまりたる。ことに打忘れたらむやうに、病のいえたるは、いと〱うれし。

あはれなるもの

老いたる親の、いたつきの爲にいたうやせたる、さながら、餓鬼といふものにやとれもはるゝやうなるを、いとまめやかに負ひたる子。今や絶えなんとて、親族などうちつどひて、なげきかなしめる。まして六字の名號などとなへいだしたる。きくさへもいとあはれなり。

心ぼそきもの

いたつきにかゝれるもの誰かは心細らざらむ。けふはどまちたるに、手紙のきたらざる。懐の中さびしくなりぬる。くすしの匙なげたまへる。行雲流水の身のたよりなきが、いと重もれる。そこかしこに神

を顧みの聲聞ゆる。夜半ばかりに、芭蕉のはさ〳〵とそよける。とり〴〵に心細きものにこそ。

にくきもの

わたとのなど、いとたからかにふみならしたる、ことに枕元。さしもにあらぬくすしのわれは顔なる。益軒先生のあざわらひたまへるやうに、物しり顔に鼻うごめかすもの。鯰髯などこしらへたるが、いとことやうに物うちいひたるなど、いとにくし。

おそろしきもの

窒扶斯、虎列剌、赤痢、などは、いはずもありなむ。梅毒などやみたる人の切開せられたるは、見るも恐ろしけれど、いたづらのなれのはてとおもへどいと心よし。

聞きにくきもの

呻なる聲。呼捨の言葉。坊主の、たからかに念佛打誦したる。ことに聞きにくし。

心すべきもの

かはや。うつり行く病。おもき患者の傍にて、聲高らかにいふこと。切開したる後。

あらまほしきもの

清き厠。すこしきみもひ。入浴室の内外科をわかちたる。寝臺。つれ〴〵をなぐさめむに琵琶法師など呼びたらむには、如何ばかりうさはらすべき。

くすしは

今井のをさはいはんも更なり。池上醫長、さては切開にたへなる加藤醫、その他はいはじ。

看護婦は

ふさ老婦。しい子。てる子。いとまめやかに、かつは、ねもころなり。けい子、すこしねぢけたり。

また

中島ます。原たけ。小川のふ。平野のふ。加藤つぎ。川合いと。本間い志。この七女史は、げに、日本赤十字社支部より來れる看護婦なりけり。日々のつとめの外に、なほ、おのがまなぶべき科業をつとめいそしめり。その傷口をあらひ、あるは、いたりを撿査するなど、ことの外殊勝におほふ。

まかなひは

概してよろしからず。賄婦は、ことにわろし。されど、線外のものなれば、はらもふくれず。

院の性質は(岡森縣會議員の談話)

もと縣立なりしも、こは縣立にて存すべきものにあらずとの說、縣會に起こりし爲、遂に癈院となりにけり。されど、十數棟の建家と、數千金の器械とは、何日までも、修繕せざるべからざる運命に陷りぬ。暫くして、今の院長、大學を卒へて後ちこの院をからむことをのぞまれし故、五ヶ年間貸渡すこととなりぬ。これ、以前の縣立が、私立と變はりたる所以なり。その後、五年の年限も經たれど、尙、いまに引續き貸與中なりとぞ。

才くらべ（九）

逢生屋女史

淺紫庵仲住

むかし、上野の國松井田に、畑中國輔と云ふ人あり。別號を淺紫庵仲住、蝶々亭、又は破蘭ふなど云ひて、もと商家の生れなれど、生れつき風雅にして、和學、謠、小皷、插花、尺八、俳諧など好みて、つねに狂歌などよみ散らして、いみじき樂みとし、かつ細字にいみじき妙を得て、殿中の扇の面に、古今の歌千百首をうつしたりと云ふ。殊に性いと溫和にして、

人と爭ふ事などなきに、處の人々おもしろがりて所く々に招がれけり。



其頃近きわたりに、またいみじき武士の歌よみ人にて、何處よりかさすらひきて、弟子共數十人、勢をふるふ事おびたゞしく、近隣の人々うち困ずるばかりなるが、仲住が名あるを聞き、恥かしめんものとて、ある日、己が家に招ぎよせ、弟子共禮義正しく挨拶し、腰のもの、懐のもの、お預り申さんと云ふに、仲住、もと、心よき人、何の氣もつかずさし出すを、うけとりて、しばらくまたれよと云ひすてゝ内へ入りしまゝ、誰れも出で來らず、晝餉ももて來ねば、用所も知らず、大に困ずるまゝ、せめて枕もがなと側の戸棚あけみしに、百人一首抄の破れたるがあり、これなりともとてとり出でゝ、其處此處ひきのばし、めづらしからねば、よみつゝ、ながめつゝするほどに、いつか入相の鐘もひゞきたり。程すぎて、一人の侍、夕餉もち來りぬるに、まづ生きたる心地して、急ぎ膳に向はんとするとき、向ふなる杉戸さ

ちらりと開けむ、主人上座に巾ひろ〴〵と大樣にかまへたる左右に、弟子數十人居並びたり。主人はよく挨拶もせず、仲住ぬしとは御身にや、いみじき歌よみその事、今宵歌會せんとぞんじて、かくは招ぎしなり。今日の會はとくよむを勝と定むべし。誰れにてもあれ、いたくにくれたるものは負て罷はり、あかはだかにして、門より追ひ出すべき掟なり。皆どくよめよ、其處も心得られよと大柄に云ふに、弟子ども一同心得侍りとて、はや身がまへす。仲住は心よき人、さりてもなほ頭をさげ、御題は何と申と問ふに、海上の霞なりと云ふ。さん候かと云へど、物はみなとられて、やたても紙もなきに困じはてたり。かくて、あかはだかになりて、門に出でんは口惜しき事と思ひめぐらすに、幸ひ、先きに枕にと、とり出しつる百人一首抄のやれしをとり、參議篁の「和田の原八十島かけて」と云へる所を引きやぶりて、そが下に、中納言匡房の外山の霞と云ふ此霞の一字さきとり、また咲きにけりのけりをも破りてつなぎ、上の句とし、さて、曾禰好忠が歌の行方も知らぬの一句をひきさきて、其下にまた、篁が舟のつり船をも破りとりてつけて下の句とし、夕餉に出したる飯つぶもてはりつなぎ、



との一首の歌となして、人々の前れろるゝ色もなく、打ち通りて、元の部屋に歸り、夕餉食べて難なく退かりけりとぞ。流石意地わろき歌人等も、いたく感じあへりとなり。

笑話

かゝみ

猿は面赤くして尾無し

多くの獸ども、相率て、野邊をあさり徃きける折しも、大雨、いみじう降り出でけれど、此はかなはじとて、とあるあばらやの檐下に雨宿りしてありけり。此時、此家のあるじ、家内に在りて、大雨ふり出でぬ、あゝ、漏るぞ恐ろし、虎狼にもまして、いと／＼恐しと、獨言ちてありけるを、屋外にて、獸ども、之を聞きて、おどろく事大方ならず、相かへりみていひけるは、我等は、つねに、虎狼ばかり猛きものは、世にはあらじと思ひけるに、今、此家にはもるぞてふものあり。そは、虎狼よりも、なほ恐しといふに、その猛きこといかにかあるらむ。疾く／＼逃げ行くべしとて驅け出しぬ。家内にて、主は、その足おとを聞き、さては逃馬なんめりとて、出でゝ、之を追驅けゝれど、獸どもは、主を、やがてもるぞと思ひ成して、われのも／＼、我先にと、足に任せて走りけるに、猿は走る技の拙くて、最後れけり。主は追ひ付き、尾を捕へけれど、猿は遁れんとて、あらん限の力を出し、眞赤になりて、相爭ひけるに、遂に尾絶ねて、からくも逃げ延びにけり。故れ、此時より、猿の面は赤くなりて、尾は生へずなりにきといふ。

又云ふ、昔時、猿、狐に向ひて、汝は寒中にも、能く鼈を捕へて食ひ、やすく冬をわたること、いと羨し、如何なる技術にて、かくは獲るぞと問ひけるに、狐いふ、我は黄昏のころ、尾を水の中に漬す。かくすれど、鼈は餌と思ひ誤りて、之を喰ふ。喰へど、やがて陸に引上ぐるのみ。外に異やうの技術はあら

じと答ふ。猿、之を聞きて、甚く道理とおもひ、いとよろこびて、其宵、敎へられたるまゝに、尾を漬して、鼈の來るを待ちける程に、池水凍りて、尾をはさみけり。猿あはてふためき、引けども上らず、拔けども脫けず、いきづみ〳〵て、力の限りに振舞ひけれど、遂に敢なくも、尾は絕えにけり。この時より、その面赤くなり、その尾も無くなりにきとなん。

須摩の月（六）

白魚女史

之ぞ母御が御巧み、かのいぬじものを住まはせんと思ふ心にもどりしを、恨みてよりの淺ましき巧み事とは推し參りぬ。さりてもあまりなる御巧み、日來情あらぬ母御とは思ひ奉りしかど、まさかに、〳〵かくまで恐ろしき事巧ませ給はんとは思ひもかけざりき、姬上、むづからせ給ひそ、御身だにいさぎよけれど、あかしたて給はん事はいと安う侍り、まづ、とく、何なりともものし給ひて、父御が御前に持ち出でられ、落しありし文とか云ふに、御手をくらべあはして、いさぎよきあかしを立てたまへ、いざ姬君、泣きなどせられては、ぬれ衣いよ〳〵乾き侍らず、今こそ人の罪を正すべき折り、濁りし源をあらはしやり給へ、何もむづがらせ給ふ事ならず、よろこぶべき折りなり。いざ〳〵とて、墨すり、短册さへさぐり出して、筆もたせんばかりに乳母がそゝのかすを、松風姬はたゞたきなす御淚をふりそゝぎながら、御頭重くふり給ふに、何を否とは仰せ給ふ。御身があかしを立つる道、辭み給ふとは心得ず。かくなりては、もはやかまはじ、犬じものゝやから、うから、

追ひ拂ひ給ひて、御家の内を淸め、殿が御心を本にかへして、早うよき人を住ませ給へ、いざ〳〵。何と仰せ給ふ。此まゝに絶えさせよと、さりては、らちあかぬ君よ、心なき姫上かな、何、犬じもの故に君が玉の緒を絶ち給ふ事やはおはする。齒がゆき事にはありけるよ。よきは、君は、さは、おはし居ませ、乳母に解く道侍りとて、姫がつね〴〵かきならし給ひし難波津の歌の草紙尋ねて、もちて、つと起ち上る乳母が袂、姫はあわてゝ引とらへ、そをも何處へは持ちゆく、恥かしきもの誰れに見せんとはするぞとて、淚ながら引きかへさんとするを、恥かしうし給ふにも折りこそあれ、之ぞ御前へさし出して、君があかしをたて奉り、日來の御勉强のほどをも合せて御目にかけ參らするなり。何を仰せ給ふ。やみねと。いな、なか〳〵に止むべき事ならず、君はともあれ、なき御上よりくれ〴〵たのみ聞えられし乳母、さなきだに、むつきの中より抱きとり奉りし君の、罪なき刄にかけらるゝを、いかでかやみ〳〵見すてられん。乳母が身にかへても惜までやは、はなし給はれとて、ふりきる袂を姫はなほしかと捕へ、志はさる事ながら、かりにも母と呼びかしづきし御方、罪うけしは自らが不德、物云ひて不孝をまさんよりは、死ぬも生るも天、何も先きつ世におかせし罪、默して此まゝにうせてこそせめ。妹、何とか思ふ。其方までつれだたんはいとおしけれど、いつかは絶えん玉の緒、をしみて不孝を重ねんより、姉は、とく、うつくしき母樣が御許へ行かまく思ふなり。のうとてせき入るに、妹も辭なく、同意の旨うなづき示して、ひとしく泣き入るに、まだあの恐ろしき鬼御前を、さやうにかたひ給ふか、御心よきにも程こ



それ、さばかりやさしき君の、先きつ世に如何なる罪をおかし給はん、ともあれ、乳母はさやうなるまがりし天に如何で従はれん。歯がゆき事よ、いつまで、鬼、むじな、狼を、此處らに住まはせて、奥様とかしづかん、その化の皮引きむきて、角なり尾なりあらはさせ、皆もとの穴に追ひはらひて見せん。いたうもれくれけりとて、なほ袂ふりきり去らんとするに、さても不孝の子とするか、乳母、かばふ心はうれしけれど、妾は中〳〵にくるしく思ふなり。たとへ、我がぬれ衣乾くとも、母様を罪におとしいれては、子として何かせん、乳母、強ひても不孝の子となさんとならば、妾等まづくびれて死なんのみ、とてもかくてもつながぬ玉の緒、とくころとて、はや下紐をときて、梁にかけんとする決志に、乳母はおどろき、あわてゝ押しとゞめて、よゝとなき、さてもあの御言葉、天道様には聞えずや、此の御孝心、父君は知ろしめさずや、勿体なし、いとほし、かなし、かゝるやさしき君、如何で見殺ろしにせられん、姫上、此上はたゞ乳母と共に、しばし山里に忍ばせ給へ、勿体なけれど爺のあばらやに、姫君様、是非に、すぐ夜のあけはなれぬほどにとて、乳母ははや、裾さへ結上ぐるを、いなとよ、妾は逃がれんとてのがるべき身ならず、たゞ妹を頼む、村雨、早う乳母が志に従ひて、しばらく何處へもひそみ、峯の松風、吹くとき〴〵を妾と思ひ忍ばれなど、後の世の心も安うなん、とくと云へど、村雨が涙はいよ〳〵しげく、あな、情なき御言の葉を聞くものかな、母様に捨てられて後は、たゞ君がましませばこそ、うきをもなぐさめられしを、君にさへ捨てられ、ひとりうき世に止まりて何かせん、火の山、は

りの谷、姉上がましゝます所にぞ諸共に具し給へとて、姉姫が傍いよ〳〵すりよるに、さりては聞きわきなし、妹よ。さりては姉上情なし。聞ねぬか、二人不孝の子とならんよりは、姉ひとりの罪。いな、〳〵、聞ね侍らじ、二人行けど過ぎがたきうき世に、ひとり止まれとは情なや、君にたくれて片時もあるべき妹ならしと互みに身を捨てゝの愛情いぢらし。

さるは、姉君こそは聞きわきなけれ。何はともゝとかくを仰せらるべき折りならず、今にも人のくべきけはひ、乳母にまかせて、とく夜の明けきらぬほどに早うとて、辭むを強ひて追ひ出し、かねて家の奴たちが夜るぬけ出る犬くゞりを、よき所と忍び出でゝ、省る姫が袂をひき、泣くを叱り、己れもふるふる足元、ふみしめ、急がせて、野原、篠原、かきわけ、〳〵、息をもつかず二三里走るほどに、ふみもならはし給はぬ幼き姫は、早くも石につまづきしにや、木の根にひきかけしにや、足さへ痛めて歩みさへむづかしきを、乳母は甲斐〳〵しく背負ひて、なほ走る程に、日は、はや高く、人の面もれはろげならず見ゆるにやつしをられても流石大領の姫上と何處となく貴なるをめづらしみ、逢ふ人毎にかへりみ過ぐれど、乳母は心元なく思ひて、一日を林の中にひそみくらし、夕づ方忍び出でゝ、妹姫を背にして走る事二三里、やう〳〵とある家、此處ぞ乳母、は立ち留りて、かりそめの柴折門、おきたるまゝに、づか〳〵と内へ入り、流石にとざしある戸、忍びやかに叩けど、木の葉のふれると思ひてにや容易く答へもなきを、なほくりかへし、〳〵、叩くほどに、初めてたうど答へて立ち出る翁、あやしみて人の顔を守りて、とみには言の葉もなし。



文林

秋雨　　近衛忠煕

昨日けふ秋かせさむくふるあめは
もみちをいそくこゝろなる覽

山家秋雨　　鍋島直大

草も木もあめふることに色つきて
わか山さとのあきぞたのしき

古郷擣衣　　長谷信篤

淋しさのなにはあれども住すてゝ
われにし里にころもうつこゑ

谷菊　　交野時萬

谷かけになかるゝ水ははやけれど
かけてそうつれしらぎくの花

秋車　　竹屋光昭

きのふけふ紅葉見にとて岡のへも
通ふくるまの音ぞひまなき

紅葉　　諏訪忠元

色ふかくそめいでにける紅葉はの
わかきを人のこゝろともかな

秋山家　　仝

日にそへて色つくせとの柿の實を
みつゝ樂しむあきのやまさと

月夜に舟こくかた　　宮地嚴夫

清見がた沖こぐふねのかすみねて
つきすみわたる三保の松むら

河霧　　阪正臣

秋ぎりにつゝみはきねて隅田がは

れはうなゐらの心地こそすれ

籬菊　小出粲

山はたのしづか垣根のれきなくさ
よめなまじりに花さきにけり

庭上月　鎌田正夫

大空のつきにむかへばわかやどの
にはもせはしと思はざりけり

夜虫　内藤存守

さまざまの虫をとゝめて夜もすがら
草ひばりのみなかせてしかな

鎌倉にてよめる中に　大畑弘國

かつをつる舟かへるなり我妹子よ
酒とゝのへよなますはやさん

世にしづむ身をやなげかんたび衣
ひるが小島のむかしれもへば

ある御館の九月十三夜看月の御會に日頃の雨晴れざりけるに今はとて罷りなんと志ける程に月の出でければ

三輪義方

立いでゝのちにいでなばてる月の
清きひかりもかひなからまし

月夜に鹿鳴く

さやかなる鹿のねをさへとりそへて
すみにすみゆくつきのかげ哉

横笛　佐々豐水

いりたちしまことの道のさがの奥
ふかくみがきし心うるはし

大井川そこにしつけるたかまつの
みさをの鏡くもらざりけり

都にありける頃紅葉見にものして

足立正枝

紅葉葉のしたてるみちは暮かねて
ゆふつきかゝる栂の尾のやま

鷺　菊池眞澄

しら鷺のみの毛も雨にぬれ〳〵て
魚まつさまぞあはれなりける

秋田　木庭芳香

千町田のわさ田のはなみ色つきて
なるこひく子のいとなかりけり

草庵　鑑谷行

谷川のみつにこゝろをわらひけり
みやこにとほき秋のやまさと

歌　宇井正夫

ひらけ行く道のしをりか花もみち
にほひもたかき大和ことのは

曉紅葉　蜂須賀隨子

こゝろあてにそれかとぞ見る曉の
霧にをぐらのやまのもみち葉

秋山路　前田朗子

山がらもこがらも鳴てあきふかき
やまぢのこずゑ色つきにけり

瀧邊紅葉　柳原愛子

二荒山しぐれもまたぬもみぢばゝ
たきのしぶきの染やしつらん

茸狩　小池道子

茸はよしありもあらずも打つれて
あそふがたのし秋のやまみち

草花藏橋　松平健子

つねわたる野川の橋も見えぬまで
咲なびきけりあきはぎのはな

野虫　諏訪晴子

秋もやゝ深くさのへをきて見れど
こゑふりいでゝすゞむしのなく

秋田

なるこ引音もさびしき小山田に
稲葉そよぎて秋かぜぞふく

山路霧

ゆふかけの山路をこえてゆく人の
すがたは霧にたちかくれつゝ

草花露重　坂田泰子

さらぬだに咲たわみたる萩がえに
露さへけさはおきそはりつゝ

菊　岩崎寧子

いかだしの棹をなふれそ岩かどに
一むらさけるしらぎくのはな

山家松　中島歌子

おもしろき松の木かげのかた折戸
山かつならぬひとやすむらん

秋興　服部磯子

新しぼりくみて歌ひてあそぶまに
いつしか秋の日はかたふきぬ

海眺望　安東菊子

大そらのみどりにつゞく沖みれど
くもにこぎいるあまの釣ふね

紅葉淺

立田ひめ錦のはたのしたそめは
また一入のみねのもみぢ葉

夜木枯

さそひ行木の葉のみかは夜もすがら
夢もゆるさぬ木がらしのかぜ

箱根の湖水を見て　清水郁子

かげうつす箱根の山のみづうみは
ふじの高根をふねぞこぎゆく

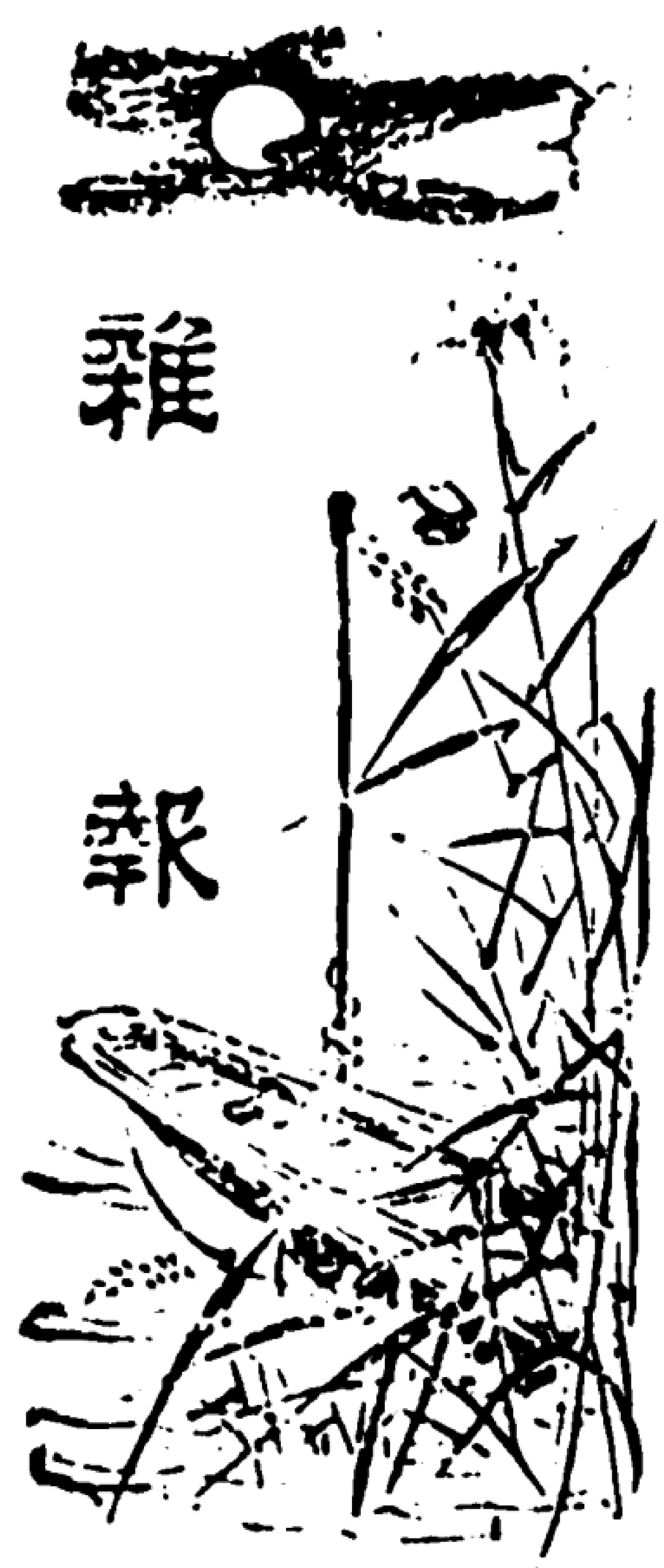
袈裟御前　清水郁子

せこのため散りにし花は今の世に
高きにほひのかくはしきかな

明治丁酉年十月某日小林鋼二君赴米國
於此詠歌以贐其行

尾崎壯三

はしけやし、小林の君は。外國に、今日が出ます。
外國に、君出まさむ。我國に、見知らぬ業。
我國に、聞き知らぬ業。珍しき、業もやあらん。
珍しき、業もありなは。一途に、皇國の爲と。
起き伏しに、心緩るべす。朝夕に、勵みいそしみ。
其業を、學び修めて。包なく、もなくましつゝ。
歸るさの、家土産にせよ。歸るさの、國つとにせよ。
はしけやし、今日出たゝす。小林の君。



●皇女貞宮殿下の御參内　去月二十四日御降誕あり、皇女貞宮多喜子内親王殿下は、其後至極御健勝に渡らせられ、去十六日(土曜日)御養育主任揖取男爵等御附添申上げ、禁中に御參内、兩陛下に御對顔あらせられたりと漏れ承はる。

●正倉院の勅封　大和奈良の正倉院(三つ倉)が、王朝時代の遺品を藏して、美術の粹を内外に誇れる由は、夙に人の知る所なるが、去七日、西四辻侍從股野文事秘書官等、奈良に趣き、同院に臨みて勅封

を開きたりといふ。

●神宮御杣山の御治定　來る明治四十二年は、伊勢神宮御造營御選坐式に相當する趣にて、夫れに要する木材の御杣山は、神宮司廳にて評議中なりし處、愈々木曾山林と御治定ありたる由。

●平家琵琶名家の祭典　平曲の名手波多野孝氏の二百五十年祭は、去三日、京都下京區下寺町五條下る本覺寺に於て執行したる由にて、其發起者は、旨人藤原春月、歌人非上千祥の二氏、齋主は冷泉爲紀伯にて、尚、藤村性禪氏は本式服にて琵琶延壽聖代を奏し、夫れより冷泉伯講師となりて、和歌（暮秋懷舊）の披講あり了りて十數番の平曲ありたりといふ。

●御歌所官制　本月二日、宮內省達を以て、御歌所官制を定められ、即日左の如く敘任ありたり

御歌所官制

第一條　御歌所に左の職員を置く

御歌所長　一人　勅任

天皇　皇后兩陛下の御製に關する事を掌り兼て臣民の詠進を管理し所務を總理し職員を監督す

御歌所主事　一人　奏任

長の命を受け所務を掌理す

御歌所寄人　七人　名譽職　勅任又は奏任の待遇とす

長の命を承け短歌長歌唱歌等に關する編纂撰述を分掌す

御歌所參候　十五人　名譽職　奏任待遇とす

長の命を承け歌御會の儀式典例を掌理す

御歌所錄事　判任

上官の指揮を承け庶務に從事す

第二條　所長及主事の俸給は宮內省官制第五十條高等官俸給表に依り第二級俸より第五級俸まで

の内を賜ひ、録事俸給は同條賜官官等俸給表に
依る
第三條　此の官制中別段の規定なきものは総て宮
内省官制に依る

兼小松宮別當如故　樞密顧問官兼小松宮別當從三位勳二等男爵　高崎正風

兼任御歌所長

御歌所寄人被仰付
但勅任待遇

東宮侍講　本居豐頴
文科大學教授　黒川眞頼
華族女學校教授　坂正臣
從七位　中村秋香
(各通)

非職宮内屬　小出粲

御歌所寄人被仰付
但奏任待遇

侍從子爵　西四辻公業
正三位伯爵　松浦詮
從二位伯爵　西三條公允
從三位伯爵　冷泉爲紀
侍從子爵　綾小路有良
掌典子爵　竹屋光昭
掌典子爵　前田利鬯
(各通)

正四位子爵　水野忠敬
從三位　長谷信成
掌典　宮地嚴夫
御歌所錄事　植松有經

御歌所參候被仰付

●女子高等師範學校生徒募集規則、及規程　文部省令を以て、左の如く改正せらる。

女子高等師範學校生徒募集規則を定むること左の如し

明治三十年十月十二日　文部大臣侯爵　蜂須賀茂韶

女子高等師範學校生徒募集規則

第一條　女子高等師範學校本科生及官費專修生は師範學校女子部修業年限六箇年の官公立高等女學校卒業生及之と同等の學力を有する者にして身体健全品行方正なる者に就き地方長官之を薦擧し女子高等師範學校長其の中より試験の上選拔するものとす
但本科生は年齢十七年以上二十二年未滿にして夫を有せざる者に限る
第二條　女子高等師範學校本科生は毎年一回官費專修生は臨時之を募集す其の期日及員数は其の都度女子高等師範學校長より地方長官に通知するものとす
第三條　第一條に依り募集するもの丶外女子高等師範學校長は身

体健全品行方正にして學力年齢當該學級に相當する者を募集し試驗の上入學せしむることを得

第四條　新募生は四箇月以內假に入學せしめ其の資性品行等を審察し適當と認むる者に限り本入學を許可するものとす但假入學の生徒は自費とす

第五條　研究生私費專修生及撰科生の募集に關する規程は女子高等師範學校長之を定め文部大臣の許可を受くべし

附　則

第六條　明治廿六年文部省令第十一號は本令施行の日より廢止す

明治二十七年文部省令第二十五號女子高等師範學校規程左の通正し明治三十一年四月一日より施行す

明治三十年十月十二日　　文部大臣侯爵　蜂須賀茂韶

女子高等師範學校規程

第一條　女子高等師範學校の學科を分ちて、文科、理科とす

第二條　文科の科目は、倫理、教育學、國語、漢文、外國語、歷史、地理、家事、體操とす

前項科目の外、習字、圖畫、音樂を隨意科とす

第三條　理科の科目は、倫理、教育學、國語、外國語、地學、數學、物理、博物、化學、家事、圖畫、體操とす

前項科目の外、習字、音樂を隨意科とす

第四條　女子高等師範學校の學科は師範學校女子部の課程に照し更に一層精深なる程度に於て教授するものとす

第五條　修業年限は四箇年とす

第六條　第四年級生徒は附屬學校及幼稚園に於て實地授業及保育に從事せしむ

第七條　生徒在學中自已の便宜に因り退學を願ふ者は支給せられたる學資を償還すべし」文部大臣は其の情狀に依り前項償還すべき學資の全部又は免除することあるべし

第八條　生徒在學中疾病に罹り若くは學業進まず又は品行修まらざるが爲に成業に適せずと認むるときは學校長より退學を命ずべし

品行修まざる爲に退學を命ぜられたる者は支給せられたる學資を償還すべし

第九條　相當の學力を有し師範學校女子部及高等女學校の教員たらんとするの目的を以て教育學及教授法を專修せんとする者の爲に研究科を設くることを得

研究生の在學年限は二箇年以下とす

第十條　師範學校女子部及高等女學校教員の缺乏を充たす爲に特別の必要ある場合に於ては專修科を置くことを得

專修科の學科目及其の程度並に修業年限、募集人員、入學者資格等は其都度文部大臣の認可を經て學校長之を定む

第十一條　師範學校女子部又は高等女學校教員たるの志望を有する者にして文科又は理科中の一科目若くは數科目を撰びて學修せしめんとする者は撰科生として入學せしむることを得

撰科生は何等の科目を撰ぶに拘らず教育學を兼修することを要

す

選科生の在學年限は二箇年以上四箇年以下とす

●聯合教育大會彙報　帝國教育會にて來る廿三日より三日間開會する全國教育聯合大會に列する代議員は左の如し。

伊澤修二	今井市太郎	星松三郎	大村仁太郎
嘉納治五郎	吉村寅太郎	多田房之助	中川小十郎
野口保興	山崎彦八	三島通良	篠田利英
鹽谷吟策	清水直義	湯本武比古	尺秀三郎
後閑一	梅澤親行	上原六三郎	

十三日迄に、同會へ通知したる、各府縣教育會代議員は左の如し。

高文利(函館)藤崎明之(高知)山高幾之丞、石井祐齋、上野錄二郎(三重)新波戶仙岳、日澤濟道、傍島元吉(岩手)原宏平、井上猛二郎高野正宗(新潟)矢部善藏、須藤周三郎、塚越柳助(埼玉)大束重善堤虎造、石井信五郎(上野)清木文造、馬場惟光、原田定吉(鹿兒島)

又同會にては、今廿日より六日間、附屬書籍館に於て教育品展覽會を催ほし、何人にも縱覽せしむる筈にて、帝國大學、高等商業學校、東京美術學校、音樂學校各府縣教育會、其他學校有志者より、數多出品あり。就中人目を惹くべきは、臺灣總督府語學校長町田則文氏より出品せし同校土人生徒の成績品、並に淸國官吏登庸試驗對策等にして、又北海道土人の出品等、珍奇の物品等多々ありと。

●婦人衛生會　去る九日、大日本教育會に於て開會せり、醫學博士三浦守治、警察醫長醫學士山根正次、及、宮本仲の諸氏衛生に關する演説をなしたり。

●女子の家塾を開く　金谷鈺子のきみ、こたび、女子の家塾を設けて、都下に遊學する女學生を入塾せしめ、望みの學校に通學せしめ、尚、其の足らざる處を補ひて、之が監督保護を成すといふ。是、寔に美擧なり。美擧なりと雖、能く之が好果を收めんとするには、極めて難し。此の事に當らんとするもの、宜しく、一身を擧げて、女學生の爲に供するの覺悟

なかるべからず。錠子ぬしが此の決心あることは、深く信じて疑はざる處なれども、亦、記者の老婆心は、敢て、君に此の贅言を寄せしむ。曰く、最も謹肅に、最も懇篤に、最も嚴正に、最も慈愛に、又、誠實に、親切に、唯、實父母の心を以て之に臨むべしと。

左に設立の趣意書を示す

家塾設立趣意書

今や文運日に進み月に盛んなるの時に當て獨り地方女子の高等教育に志す者少きは何んぞや世の父兄子は女のみは高等小學卒業にて甘んずるにや將又實際に於て高等小學卒業程度の女子にして實用に足れりや語を變へて言へは地位あり教育ある男もを内助するに足れりと爲すや彼等父兄も決して初等教育に甘ずるものにあらずして其不足を感ずるや明なりと雖も是れに高等教育を授けんとせば勢ひ東都に遊學せしめざるを得ず然れども女子を上京せしむるに當り之を下宿に居らしめんか其監督を依賴するに適なく終に或は中途にして業を廢するもの比々皆然り之を學校寄宿舍に委ねんか其限あるを如何せん是に於てか地方子女を東都に出す困難の第一は相當の監督者なきによるを知る妹の此事を憂ふるや久し即ち嘗って此任に當らんと職を辭して東都に來り茲に女子の爲め家塾を開き專ら右等地方女子の爲め父兄に代つて嚴肅なる監督者と爲り其品性に應じて學校を撰び是に通學せしめ朝夕課程の復習は勿論普通學に於て足らざる英漢數習記等の諸學を授け一方には家庭に必要なる事柄には日々順次を以て之に當らしめ知らず〱の間に實際に適する婦人を養成し母なる人に代りては誠實を以て之を教養し病氣其他の事に於ても家族的に之を愛撫し妙齡の女子にして父母の膝下を離れて修業の途にあるも不時の出來事に因つて困難を感ずる事なきを期す

これ妹の此家塾を開くに當り其趣意として責任を帶びて逃よる所なり

地方の父兄些少の困難の爲め其最愛の女子をして學業を廢し一生を誤まらしむる事なく奮つて遊學せしめん事切望の至りに堪へずと云爾

四谷區仲町三丁目十八番地

私立金谷家塾々主　金谷錠子

●あはれの二つ

一は母を失ひ、一は子を亡ふ、あやしくもあはれの事こそあれ。過ぎし頃、府下神田區三崎町のさる所に、泣顏哀れに、足元危く立ちはけたる二歳許の女の兒ありき、垢付きたる緋金巾と唐縮緬とを綴り合せたる單物を着たるが、はや日暮と

なりたるも、連れ行くものゝなきに、最寄の巡査怪しみて立ちより、家は何處、母は如何せしなど尋ねたるに、只しく〳〵と泣くのみにて、事の樣も知れざれど、身邊をあらためみしに、懷に一枚の紙あり、啓き見るに、母は入水して味氣なき此の世を捨つれど、殘りし此の子を頼むとの旨、筆の跡おぼつかなくも書きつけありたり。依りて巡査は、其旨本署に報じ、區役所の手を經て養育院に送りたりと。果して、此の母は、世を捨てしものか。世にはあらで子を捨てしものか。いづれ。

又、府下豐嶋郡板橋の町田五郎とへいるものゝ長女しげは、本年七月に生れたるものなるが、去る夜、鼠に面部を咬まれて、あへなくも其の儘死したりといふ。親のなげきやいかならん。あはれこの二つ。

●女子書翰文　博文館發行　（定價三十五錢）

華族女學校の學監下田歌子ぬし、こたひ家庭文庫といふを著はす。本書は、即ち其第一編なり。つきて見るに、先づ書翰文につきての注意として、文章のおこり、及び女子の消息文、書翰の文章、字句、書式、用紙、取扱方等を示し、次て項を凡そ十八ばかりに分ちて、各種の心得、作例を掲げたり、すべての躰裁普く調ひていふ處なけれども、只如何はしく思はるゝは、行文男々しきに過ぎたるになん。今少したわやかに書きたらむにはと思ふはひがことにか。又、その篇頭には、歷代女子消息文、及作文の材料等を挿入したり。用意周到にして、能く讀者の意を迎ふるに足らん。

●小年夜談　こは、北隆館より發行する小國民の臨時增刊なり、少年世界と共に少青年社會にひろく愛讀せる。附錄トラファルガルの海戰の圖最も美麗なり。其の外例によりて、面白き有益の記事多し。全紙總て百六十ぺーじより成る定價一冊十二錢、

●支那文學大綱　第二卷出づ百樂天を載せり文學士大町桂月氏の筆にかゝる。

女鑑月並兼題

十一月五日｛歌……深夜時雨　文……長々病み臥せる人に寄す｝　十月廿五日〆切

十一月廿日｛歌……落葉滿庭　文……新嘗祭｝　十一月十日〆切

〆切に遲れて到着したるは總て沒書とす



教の庭

十月廿日兼題　海邊紅葉

天

浦のあまの手折らぬ先に見はやさん　松山市鐵炮町十八番戸　野中わさ子
磯邊のもみち染めつくしたり

地

薄くこくいそへの木々の色つきて　山形縣新庄町字金澤　金森とし子
海人も錦をれるかとそれもふ

人

そめつくす岸のもみちに秋そとは　愛媛縣松山市二番町八番戸　上野君子
たつのみやこの人もしるらむ

秀逸（十首）

しま山のひとむら杉の葉かくれに　住山幾子
ぬる手のもみち色に出にけり

紅葉葉のうつろふ色になにはゐの　中山とみ子
浪のはなさへわかねさしつゝ

浪よするいそへの紅葉添て見れは　小野寺竹子
した葉まてこそ色つきにけれ

なみの花くたけて白きいそやまの　仁保志勝子
こすゑはやも紅葉しにけり

いそやまの木の葉も今は色つきて　諸井久良子
秋の氣色の志るくそ有りける

打ちよする波の色さへくれなゐに　川代艶子
そめてこかるゝ磯のもみちは

心なきあまひとすらもふねとめて　江口とみの子
いそ山もみちめつるころかな

あまの子も紅葉の色にあこかれて　宇高松子
釣をもたれすいそつたひしつ

よる浪の花くれなゐに見ゆるまて　宮地琴子
岸のもみちはそめつくしけり

越のうみのしはかせさむみ米山は　山根久子
またきに木々のもみちして見

（以下原稿到着順）

波わけて入る日のかげにいそやまの
にしきてりそふあきのゆふぐれ　水川里子

海の面もちしほにふかくにほひけり
きしのもみぢにゆふ日さすころ　佐々小琴子

わたつみの神もめづらんたまひろふ
いそやまのはのもみぢつるころ　佐々有鄰子

浪のあやにしきの島におりかへす
いそのもみぢのさかりなるらん　永井さい子

吹くかぜに海邊のもみぢさそはれて
なみのまに〳〵たゞよひにけり　上島龍子

打ちよするなみもあきのいろ見ゑて
いそやまかへでもみちしにけり　西川順子

雖かぜに吹かれてそまるもみぢばゝ
わきていろこきものにぞありける　竹内頼子

わたつみのたつのみや姫そめにけん
いそべのもりはもみぢしにけり　美奈井芳子

あら浪のよせくるここにそめにけん
わきていろこきいそのもみちは　石川頼子

うちなひくのきのかへてももみちぜし
ころにはいさふ八重のしほかせ　石川樂子

もしなやくしつかさやまも此ころは
いろなつかしきのきのもみちは　石川久子

うちよするなみの花にやきほふらん
にしきおりなすいそのもみち葉　富士村幾子

うちよする浪のしふきやそめつらむ
いそやまもみしいろつきにけり　山水照子

いそ山のこすゑいろつくしみしはは
よせくるなみもそめてけるかな　山本のふ子

夕日てるみさきのもみちいろつきて
よせくるなみにかげもにほへり　高橋きん子

にしきなすいそへの紅葉うつろひて
よするなみさへいろつきにけり　山手てい子

あまつゝくも井になきてもみちはの
いろそめにけりすみよしのはま　秋園菊子

しま山のまつの木の間にみゆるかな
みつももみちのいろにうつりて　西村虎子

あきくれはなみまへ色のかはるかさ
みれはもみちのうつろなりけり　溝口寬子

打ちよする浪にもあきの色もみゑて
いそやまもみちそめ出てにけり　根岸英子

打ちよする浪のしふきや染めつらん
いそ邊のまつのつたのもみちは　澤田淺子

うつし絵の筆もおよはしすみよしの
まつの木の間にみゆるもみちは　近藤芳子

立ち並ふまつの木の間にほのみゆる
もみちのいろのうつくしきかな　鈴木繁子

よる波もからくれなゐにみゆるかな
いそやまもみちいろ附きしより　吉川勝子

いそやまのまつにかゝれる葛もみち
した行くなみもくれなゐにみゆ　曾山道子

もし倶焚く磯家のもみちいろみゐて
あきのふかさを汲みてこそしれ　大森純子

染めわたすいそやまもみち色附きて
おもゆく舟もしはしさをさむ　木村綏子

こよろきの磯邊はるかに見はたせは
いそやまもみちいろのなかしさ　楠精子

舟さめてしはしなかめんうすくこく
あなたのきしに立てるもみちは　香川韻子

わたの底ひそむいさこも染まるまて
いそやまもみちいろまさりけり　土岐米子

伊豆の海や沖のをしまのもみち葉の
ゆふ日にうつろかげのさやけき　萩原章子

いそやまに風や吹くらしもみちちる
はまのまさこはにしきしくなり　田中ゑん子

夕日かけなみにてりそふもみちはに
いそ邊のやまはにしききてけり　木村きく子

いにしよのこさをもおもひいつの海
にしきおりなすきしのもみちは　田中ひろ子

和歌の浦吹き來るかせにもみち葉の
はなさ見るまて散るそめてたき　赤沼孝惠子

波のうへに色もにほひてうすくこく
にしき染めなす木々のもみち葉　松浦よし子

しほかせにいそへの紅葉いろはゐて
くたくるなみににしきさらしつ　浦井豊子

磯の邊ににしきおりなすもみち葉は
なみのはなにもいろやうつらん　水上浪子

うなはらにしきうかふさ見ゐけるは
なみにちりしくもみちなりけり　長山孝子

うちわたす志賀の浦はの朝ほらけ
にしきのなみはもみちなりけり　河村さち子

磯やまの巖のもみちはしたにみゐて
そらこきわたるこゝちこそすれ　綿野りき子

しほ風におきつしらなみよせくれは
にしきをうつすいそのもみちは　西艶子

和田つみの岸のもみち葉うつろひて
にしきのなみのうつくしきかな　磯野たま子

住の江のきしのもみち葉ちりそめて
波にうかふもうつくしきかな　磯野こさ子

きしもみち誰か入船をたまつならむ
にしきかされてしらほまれきつ　天野文子

夕日かけさすかにおかぬなかめかな
あまのき端のもみち葉のいろ　池谷富子

いそやまの岩根をそむるつたもみち
入り日にいろをはねまさりぬる　中桐杏子

しくれゆくいそ山かけのもみちはは
あまかこころもふうつるかさ見ゆ　舘脇ます子

しほかぜにもみ出ぬらしうらまつに
　かゝるはつたのにしきなりけり　晋妻近下

いつしかも磯やまもみちうつろひて
　にしきをさらすうみのおもかな　戸塚てつ子

ふる浪もやしほのいろにみゆつるは
　うらのもみちやうつろなるらむ　柳田里子

もみちばに夕日照りそふかけみれは
　よせくるなみもからにしきなり　吉弘周子

わたつみを吹くしほかせも秋ふけて
　いそへのもみちいろ付きにけり　坂齋香子

茂りあふまつの木かけのひさもみち
　須磨のあらしにいろまさりけり　政山ちゑ子

波のいろもからくれなゐに見ゆ染て
　いそ邊のもみちいまさかりなり　田代綾子

うちよする波のまに〳〵うつろひて
　みゆるうみへのつたもみちかな　寺田まさ子

もしほやくけふりの閑に任の見ゆる
　いそやのゝきのはつもみちかな　吉村ふて子

いそやまの岩かきもみちうすく〳〵
　よるしらなみのいつそめにけん　藥師寺雪子

うら風にいそへのもみちちりにけり
　にしきにましるかひをひろはむ　近藤よし子

よるなみら色にそまりてこさなるは
　にしきのうらのもみちなりけり　白石梅子

あきふかきうらわによするる波の色の
　ちしほさみしはもみちなりけり　福原菰子

しら波もくれなゐふかく見ゆるかな
　はまへのもみちかけをうつして　青木眷子

つゆのみか時雨もまたぬあらいその
　なみにもはやくそむるもみち葉　大寺浪遠子

おく霜に千賀のうらわの木々の葉は
　にしきにまかふ色に出てにけり　杉山琴子

浦ちかくよせくるなみのくれなゐは
　きしのもみちのにしきなりけり　土肥仙子

わたつみの水もてりそふもみちはに
　たつのみやひさあきをしるらむ　千田きみ子

過きかてにを舟をよするなみまにも
　いそやまもみちかけそこかるゝ　山本旋子

しら浪のあやもそめけりいそやまの
　まつにかゝれるつたのもみちに　穗積穩子

しほ風に吹かれてゝなほくれなゐの
　いろはかはらしいそのもみちの　向井延子

打ちよするなみにも秋のいろ見ゆて
　いそやまさくらもみちそめけり　弘田ゆき子

わたの原みちひろしほのいく千しほ
　もみちしにけむ木々のむらたち　坂田きみ子

しらなみのはなさへ色にいてにけり
　いそやまもみちに任ふさかりは　名取正代子

十月廿日兼題　茸狩の記

天

肥後國熊本市白川新屋敷町堀榮一方　木川里子

今日は空もいとよくすみわたりければ、いでや茸狩にものせむやと、親しき友垣のいざなふまゝに家出でゝ、わたりちかき山べにものしつ、路すがら今をさかりと咲にほふ秋草の花ふみわけたどりて、やう/\山につきぬ。人々よろこびしむし松かげにやすらひけるに、あやしくはなをうがつ香の、さとふく風にかをりくるは、茸の香ならん、いざとてれいのがしゃ落葉のしたをあさりありけど、もとより馴れざる姿等には見わたらざりしを、案内にとて伴ひつる翁のをしへにしたがひて、木の根岩のはざまなどよりあまたとりえし嬉しさ、何にたとへんかたなく、人々いとめづらしきこゝちして、時のうつるをも忘れけるに、たづさへしかたみにあふるゝころは、日もやゝ西にかたぶきぬ。うち擔き歸途につき、やがて家にかへりて、わすれがたきたのしさを燈のもとにかくはものしつ。

地

備前國和氣郡閑谷　西つや子

春の野遊、夏の螢狩にもまして、樂しく面白きは、實に秋の茸狩にこそあなれ。先つ日、親き友許訪れつるに、徒然なる折柄とて、いといたく喜ひて、種々の物語の末、友の「君は茸狩に行給ひし事やある、妾能き邊りに導きまつらん、ものし給はずやと、そゝのかさるゝまゝ、さらばとて打連立ち錦なす山の紅葉を分け入りぬ、かきよする人の無きまゝ、いやが上にも敷き積りたる、去年の落葉の、いたく朽ちたるに、はや今年のも打ち交りて、さなきだに小暗き邊り、此程の秋雨に、いとゞしめやかに、朽木の香りいと高く、たどり行く足も、ともすれば、いと深う埋めらるゝに悩ひながらもいち早く、我れ見付けなんとて、彼方此方さまよひつゝ、木の根岩陰を探りなどして早くも峰近くきぬ。友の、此邊りこそ殊に澤なる處なれ、心して求め給へと云ふに、いと嬉くて、いかで探り得てましと思ひつゝ、此處彼處あさり見つれど有らず、果は路もなき、並木の中に迷ひ入りて、困じ果てぬる折柄、峯の方にて、何處に

か行き給へる、早う來給へ數多見付けぬるをと、山彥の答へをさへ添へて、呼ばるゝに、あへぎつゝ登り行けど、友のゑましげに、幾つか得給ひつると、問ふに、否一つだにと云へば、なれ給はぬ人はさもあらん、妾數多見出しぬれど、君に取らせ參らせんとてさし置きぬ、いざ取り給へ、彼處のなど、指さゝるゝに、いと嬉く、數へらるゝまゝ、やゝふくらかに積りたる、杉葉取りのくれば、得ならぬ香して、いと見事なる茸あらはれぬ、あまりの嬉しさに、手の汚るゝをも忘れて掘取りぬ、其より、なほ、遠近と隈なくあさりて、今は籠にあまる迄に得つ。友の、あなつかれぬ、暫し息ひて歸りなんと、急がるゝに、せん方なく、心殘して山ををりぬ、友の家に着きし頃は、はや入日峯にさす頃なりければ、暮れなば山路の便惡し、いざまからん、實に今日ばかり樂しき事は侍らざりきと、別れを告ぐれば、君の得給ひつるなれば、澤ならずとも持たせ給へと、與へらるゝまゝ持ち歸りて、夕げに供へ、父母もろとも香ばしきにほひと、めでたき味ひを愛ではやしぬ。

樂しさのなかばなりともとめ來きて
　またこん秋の思ひでにせん

人

甲府市川田町　名取正代子

はやうより、待ちわたりつる秋の、やう〳〵末つかたになりぬ。けふしも、あしたより、ちりばかりの雲もあらねば、いでやわらはべども、そゝのかして、木のこがりせばや、近きわたりのは、まだしと聞けば、山路深うも、紅葉の木のまわけ入りて、しらすの松原わたりまでとて、わりごなど負はせて、いでたつ、やがていたれば、折よくも、くさ〳〵の茸、かしこに、こゝに、生ひ出でたり。見るよりいと〳〵うれしうて、れのも〳〵のゝしりあひつゝ、山人のあなひのまゝに、いさとて狩りあつめぬ、實に木のこのいづれはあめれど、松茸のにほひにくらぶべきはあらざりけり。つぎてはつ茸も又めでたし、しめじの中にも、大黑しめじといへるは、ことにめでたしとかや、つぎて、千本しめじも澤にありつれど、もすれば、よからぬ毒をもたるものありと聞けば、えとらず。かくて、山人と共に、ひねもす狩りくらしつ

つ、家路は更なり、世の事はさしげきも、打忘れつれぞ、けふ一日の樂しみは、こよなう、いのちのぶる心地せられてなん。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

おく山の楓一葉二葉いろつきそめしより、は山は松の葉末の露しげくなりまさりて、分け行くそでもしとゞにぬれぬべき此ころのけしき、いはんかたなさに、友がきそそのかしてまくらの山に茸狩にものしつ。路のゆくての百舌鳥のからこゑ耳をつらぬき、谷の水音に心すまして松の下かげうちはらはんとせしに、ゆくりなく松茸ひとつかきいだしぬ。あなうれしやとうちさけへは、あたりの木かげをかりくらせる友人もはしりよりて、みつよつふたつ狩りねしこそ、今日の山幸にはありけれ、あなうれしや。

高橋きん子

此頃ふれる秋の雨、いや物すごく暮らしくに、夜はより晴れて、けさ見れは、空いときよく山に野に、きり立ち渡るそのけしき、げに心さへすみわたりぬ。幸ひけふは、休日なれは近き學ひの友どちを二三人さそひて、柿の葉に、飯を包みて腰につけ、山邊に向ひ茸狩に、立ち出でゆけばふもと路の、野邊の千草も衰へて、咲きのこりたる、花にはに、千々の玉つゆおきむすぶ、そがうちすぎて、たど〳〵と、谷の細みち踏みわけて、山にのぼれば、みどりなる、松の木のまに、うす紅葉、時をねが底に錦なせり、木かげかきわけ探りつゝ、茵なうれば、思ふさち、供にうらなみ踊りつゝ、谷間におりて、山川の清きながれに手を洗ひ、口をそゝぎて、木の下に、茱なりしき圓居して、しばし休らひ腰にせる、飯を食ひ立ちいでゝ、又そこゝゝを尋れつゝ、落栗など拾ふ樂しさに、思はず秋の日の傾きぬれば、皆々思の外のねものおひ、げに面白く歸りて、けふの遊びの樂の、そのあらましを、書きつらねつ。

田中ひろ子

一日ふた日とすぎゆくままに、野べのけしきもうすらぎぬときゝていと口惜しう思ふ折柄、したしき友垣、みたり、よたり訪ひ來てけふは天氣もよし、野道もかわきたれば、例の山にて茸狩せばやと、さそはるるままに、急ぎ仕度をとゝのへ、はしために、かごなど持せて、立ち出づれば、いく程もなく山のふもとにつきぬ、見渡すかぎり、大松の幾萬本とも、かずしれず立ちならぶ、そがうちに、松虫の聲きようなきいでたる、いと床し。草ふみ分けて入らんとせしに、きのこの香ならん、いもいはれぬよき香のせしに、人々うれしさまさりて、我さきにと、かけのぼり、いざあさらんと、木の根落葉のかげなど、かいさぐりしに、あまた見いでて、いと、うれしく、いよく深く分け入れは、ます〳〵とりいでて、其面白き其たのしさ、いふばかりなし。やがて、かごにもみちければ、なしみし心をあとに殘し、あすまたこんと友に約して、家にかへりぬ。

輕部森子

久しぶりに散歩せんとて家を出れは、足弱く五六町も進まぬ内に、はや疲れぬ、されど、はるか前なる山中にて、茸狩人のさわがしく我も〳〵と騒するに、心をはげまし行く。程に、十五町二十町も來

たれば、はしめのつかれをも忘れたるが如し、あゝ何事もこれなり、けり。稽古さらひの生徒等が、うまく學校へ出來る筈のあるへしさて、思はす足しげくあゆみたれば、字うちこしさ云へる谷に至りたる處、遙か隔て生ひ繁れる樹林の中に白うして菅笠に似たるものあり、何人か置き忘れて去りたる笠ならんさ思ひながら、近づき見れば、何ぞ計らん世に珍しき一本の大蕈なり、碎けぬ樣大切にさり歸り近所の人々に見せしめたれども誰ありて名を知る物なく、唯太なるに驚くのみ。

山手てい子

ふりつゞきたるあめの、なごりなうはれわたりたれば人の心もすが〳〵しう、よろづのび〳〵しきこゝちぞする。斯る折から、かしこの丘こゝの山べにものして、小松がもさに、落ち葉がかげに、しのびて生ひたるきのこ狩るこそおもしろけれ。うなゐらは、足のつかれもそゞろに忘れてや、けはしき道をいばらの中をも、けぢめなうふみさくみて、こゝにも一つ、又一つなど、かたみによびかはしつゝ、ほこりがなるもをかし。萬もゐるてもみなもみぢせる深山べの、得も云ひ知らぬ秋のけしきに、家路もわすれ、あこがれて、色ふかき夕日のかげに、もみぢばの色まさるまでる狩り暮しゝこそ又なくたのしきわざなりしか。

吉村ふて子

おくつゆいさ白き朝、秋もはやわつかになりにけりなどいひつゝ、門のあたりたゝずみあるくに、去年の紅葉がりのをり、こさしの蕈がりには共に友さちきりおきたる友のさひきて、朝きりのたえ間よりほの見ゆる紅葉もいろつきぬなり、いさや今よりたけがりにさいさなへば、ちかきあたりの友たちさそひなさするまに、ひろすくる頃になりぬ。へたてぬ物語りなさしつゝ、おもふ山につきぬ。秋山の面白さにうかれつゝ、いはかれ松かれあさりつゝ、しめし初たけなさきそひさりて、かへさは三日月のかけにおくらるゝも、またたのし。

杉山學子

籬の菊も咲き匂ひ、さこよの雁も渡り來る秋の半ばさなりにけり。日頃は秋雨ふりしきり、五月の空にあられども、鬱陶しきまゝ、ひさり家にて讀書などしてありけるに、今日は空よく晴れわたり、心地ようにおぼゆるまゝに、山にも遊びて、紅葉にても見ばやなど思ひありつる處へ、親しき友ごち來られ、今日のよき日を徒らに家にのみおくらんも心よからねば、何處かの景色にても眺めんか、又あなたの松山には、茸の多くありさか聞けり、茸狩も一入おもしろからん、行かばやさ勸めらるゝに、われもそを思ひつるこさなれば、心浮き立つばかり、そはよき事ならん、さらば今日は狩茸せんさ、その仕度なし、しづかに出で立ち、四方の山邊の景色などながめほめつゝ行くまゝに、はやさく思ひの山につきにけり。小高き所に腰うちかけ、ちりしく紅葉などめでありしが、一人の友の高らかに呼びぬる聲に、行き集へば松茸の數多か松の下露ふかく傘の開けたる如きまだ出初めなるなど出でありしかば、一同喜びあひてこを取り、そこかしこさ尋ねさがし、かなたの谷へおち降り、こなたの峯にはひさり松の下草ふみわけて、思ひ〳〵にさり集め、そこなめりこゝなりけりさ、かよわき足に疲るゝもしらで、山々ふみわけたれば、漸く疲れを覺ねけり、かたへの友も疲れにけん、茸も數多さりし故、なごりおしくも疲れにたれば止みなんさ云ふに任せて、諸共にかへりの

路に向ひけり。道なき山をふみわけつ、おどろがもとを押しひらき、散る紅葉々をかざしとなし、めぐり〳〵てやう〳〵に元來し道に出でたれば、茲に疲れを休め、友たちのとりゐたる茸などを比べ見るに、香茸、松茸、初茸、など色々數々とりける中に、一人の友の、いといみじう多くとりたるに、皆々もおどろきけるに引きかへて、おのれのはいと少かなるに、はぢにけり、暫にして疲れも癒ゐたれば、氣を勇ませて起き立ち、我が家にかへるを急ぎけり、四人の友の打そろひ、學びの庭に學びるつ舟遊てふ唱歌などうたひつゝ、いと樂しげに歩みしかば、近からぬ路のりなれど、程なく我家につきたるは、日もはや西に傾きて、あやめも見わぬ時なりけり、燈火の下机をかりて、今日の遊びをかくはものしぬ。

東野けい子

いつしかと待ち渡りし七草の盛りすぎて、折り〳〵打しくるゝ空も、もの淋しく庭の苔ちらいとしめり勝なるに、名もしらぬきのこの、三ッ四ッ生ひいてたるを見て、山へも今や盛りなるらん、たつね見はやと、友たちさそひ、打連れて、露いとしげき菊むらをふみわけつゝ、馴れぬ山路を行けは、女郎花なとの、人まち顔に咲き殘れるもあはれなれは、すゝきの穗のおほされてたてるもなかし、なほ深く入りて、松が根の木の葉ふかき處なとさくるに、一つたに得れはなほこゝかしこさおさる折しも、ふとめてたき松茸生ひしを見て、みな〳〵うち喜ひ、とり〳〵あさり得て、小籠につなき、こよなき得物とめでゝ、ほこりかに歸りぬ。

丸岡鶴子

長月ばかり、北山に世はなれて住める伯母人の許より、秋の香ゆかしき頃、木の子がり思ひ立ちねと、のたまひおこせ給へれば、いと嬉しうて、一日の學びのいとまに、二人三人の友どち打語らひ、例疾く出で立ちて、晩稲かりほす小山田のあぜ道ふみわけて行きぬ、門の外早かりしなど云ふ聲聞きて伯母君嬉しげに門邊に出迎へ、奥に案内して、くさぐさの物語してひろげたふべつゝ、さてそが後の山に分け昇るに、木々の梢は色つき渡り、二月の花よりなど打ずし行く程、吹く風あやしく、秋の香ぞする、いで、この邊よりやあさらんと、落葉ふみわけ、裳の裾高く、はぎもあらはに打ちかゝげたる樣、日頃にも似ず、可笑げなるに、木の根、岩の間など、おのがじゝあさりて、稀に生しを見出したるなど、其樂しさ日頃の憂も今日一日に晴れ渡る心ちして、互に奪ひ合ふ程、秋の日いと短く傾きぬれば、立うかりし木の本はなれて、友どち打連立ちて今宵は一夜松吹風を友としすめる、伯母が家に宿りて、諸共に歌よみ文作りなどするにこ、已もかくなむ物しつる。

弘田ゆき子

心づくしの秋深み、荻の上風萩の下露、とりどりにあはれを競ふ折しも、親しき友の二人三人そのかすままに、近きわたりの松山にあこがれ出でぬ。野路の尾花露しげみ、啼くなる虫の聲々に、袖ぬらしつつわけゆけば、やがて心ざす山路にさしかかりぬ、此の尾の上よりすべて松はかりなるに、さと吹き來る風の、只ならずうるはしうかをりくるに、友どちうち喜びて、茂みがもとにわけ入りつつ、心あてにふぐしもて堀りみれば、松を名におふ茸ぞ、さはに埋れ生ひたる、皆々打ち興して、堀り試み見れば、おのもおのも、籠にみつるまでになりたる頃、日影ややうすれて夕暮そむるにうち驚かれて、

又も來むあきの山路をふみわけて
　　きのこ狩るへき松の下陰

など口すさみて立かへる頃は、ほとほと家には火ともす頃になむ。

三輪田眞佐子著

女子教育要言

來十一月十五日發行

●定價金三拾貳錢
●郵税金六錢
●郵劵代用一割増
但一錢切手に限る

女子教育要言目錄

○第一章　緒言　○第二章　女子教育の大本　●女子教育の意義●一切の能力●實學●國情と教育●國体と一致●教育と風土●富の程度と教育●教育と宗教●道徳の主義●女子の天職　○第三章　女子の徳育●天然と女子●女徳の必要●女子徳育の淵源●儒教と女子●時勢と教育●女徳涵養の方針●女徳の要目●徳育の方法●人物の養成●學風●感化●校風●師道●寄宿舎●修徳の工夫●女傑崇敬●概要（第四章　女子の智育●女子智育の目的●疑問●智識の價値●智識の撰擇●智育と婚期●必要なる智識●人類としての智識●國民としての智識●自衛の智識●家政の智識●妻たる智識●母たる智識●學識●智育の素因　○第五章　女子の体育●女子体育の理由●体育の手段●擧止を注意すべし●習慣を改むべし●衣服●身裝●運動●飲食●境遇●婚姻●休養　○第六章　女子の美育●美●美育●天地の秘義を悟るべし●和合の思想を養ふべし●色彩の辨識につきて●配合の意匠につきて●態度●純潔●附言　○第七章　女子高等教育●女子教育上の關係●人類の天性を全うせんため●國家の文化に伴ふため●男子との權衡を有つため●上達の道を開くため●高等教育の範圍●適當なる學科●注意　○第八章　女子の學制●學校教育の倫理●讀書●數學●作文●裁縫●家政●本邦歴史●其他の學科●女子特別教育　○第九章　終結

本書は三輪田眞佐子刀自が女子教育一班と題して女鑑にものせられし所のものなり本社今同刀自に請ひて訂正増補を請め之を世に公にせんとす女學生諸嬢は更なり兒を懐く婦人も針をもてる少女も必之を讀まざるべからず

此切符を截切して封入の上**來十一月中**に御申込あれば定價の**二割を割引**すべし

女子教育要言
特別割引券
明治三十年十月
國光社

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

女子の友

第八號 十月十日**發行**

毎月二回 **定價** 一冊金八錢六冊金四十六錢●十二冊金九十錢●二十四冊金壹圓八十錢◎全國無遞送料●郵券代用一割増

口繪 橋逸勢の女妙冲尼(福地天香考證)(石井鼎湖畫)鮮麗なるバレンズリ彩色畫

女子の友 男女の關係(高等師範學校教授谷本富) **家庭** 食物の作法●點茶

史談 妙冲尼(田邊千秋) **學藝** 清氏文粹講義(華族女學校教授阪正臣)(金玉集講義宮内省御歌所大口旅師)

童話 星野銀子の話(樋口勘次郎) **教育** 小兒心理學

(文學博士元良勇二郎)幼兒保育法(女子高等師範學校附屬幼稚園主事大久保介壽) **小說** 弊時(ひとつゞ)妻の鑑(甘泉漂標) **漫錄** 藻刈舟●面白叢團 **文園** 皇后陛下の御令德

(學習院教授關根正直)浦づたひ(華族女學校學監下田歌子)其他歌文數十首 **雜報** 十數件 ●懸賞歌文募集

●發行所 東京本郷元町一丁目三番地 東洋社

●東京大賣捌所 東京堂●北隆館●東海堂●田中屋●尾呂志屋

日本畫通信講習會

●●第一號通信錄來十一月三日天長節發刊●●

◎何人にても最親切なる最學び易き順序方法にて日本畫を通信講習し兼て其教授法の一新を期す教育家工業家並に一般圖畫に志ある人は至急入會あれ

●本會講師(姓名いろは順)

大橋雅彦君 東京府尋常師範學校教諭
木元平太郎君 東京府高等女學校講師
白濱徵君 高等師範學校教授

●本會賛成員(姓名いろは順)

熊谷英太郎君 東京府高等女學校長
髙本雅邦君 東京美術學校教授
岡倉覺三君 東京美術學校長

高等師範學校長
河内信朝君 東京美術學校教授
川端玉章君 東京府尋常師範學校長
野尻精一君 女子高等師範學校長
秋月新太郎君

會期一ヶ年●毎月二回通信錄發刊並會員製作物檢閱訂正●入會金貳拾錢●會費前金一ヶ月參拾錢●三ヶ月八拾六錢●六ヶ月壹圓七拾錢●一ヶ年參圓三拾五錢●一ヶ處十人以上一纏申込一割減●郵券代用一割増●詳細規則郵券二錢にて送る

東京本郷元町一丁目三番地東洋社内

日本畫通信講習會

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替 銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
十二冊前金（半年分）	壹圓
全國無遞送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十年十月十九日印刷
同年十月二十日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社（電話番號本局八八）

寶石入指環



(一) ダイヤモンド及キャツアイ入甲價八十五圓●乙價七十五圓●全眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價三十圓

(二) ダイヤモンド入甲價參百參拾圓●乙價貳百八拾圓

(三) ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

(四) ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七十圓●全ダイヤモンド及エメラルド入甲價百八十圓●乙價百貳十圓

(五) ダイヤモンド及キャツアイ入甲價貳百圓●乙價百七十圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八十圓●乙價百五十圓

(六) ダイヤモンド入甲價百八十圓●乙價百五十圓●全ルビー及サツフアヤ入甲價五十圓●乙價四十三圓

(七) ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參十圓

(八) 眞珠入甲價參十圓●乙價貳十五圓

（市外ハ送料金貳拾錢）

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下

サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若シクハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アラバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ貴意ニ適ハザル時ハ御講求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應シテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戾シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘザルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

妙技一等賞牌



東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）

天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）

天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戶

天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地

天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町上野屋方

天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方

天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷所）